



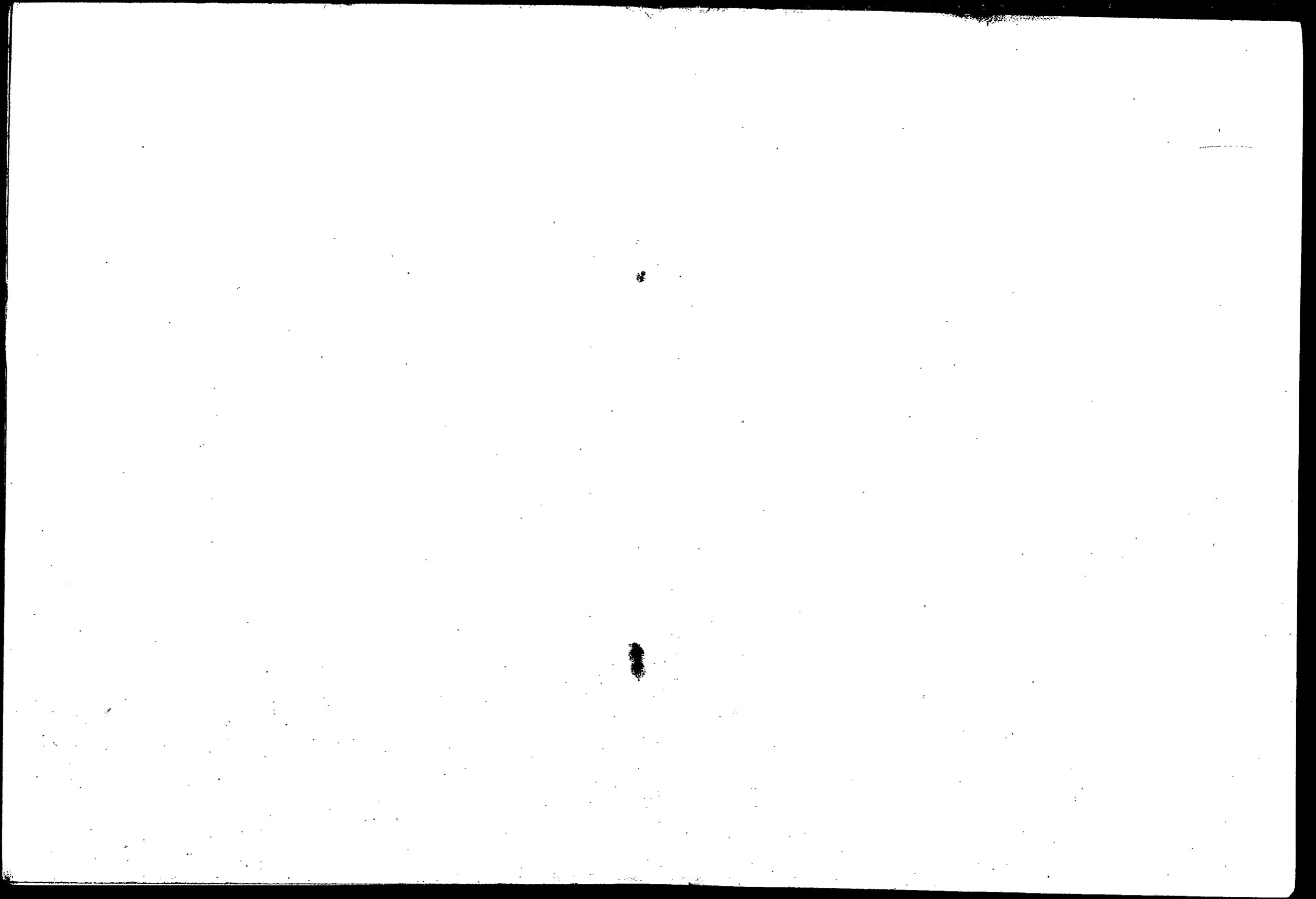
昭和七年度古蹟調査報告

第二册

慶州忠孝里石室古墳調査報告

朝鮮總督府

庫文閣内		和書	
函	冊	號	類
		20608	2/107



292.21
8

292
JmDa
8

慶州忠孝里石室古墳調査報告

昭和七年度
古蹟調査報告
第二册

正誤表

頁	箇所	誤	正
四	四行目	圖版第三、第六	圖版第三—第六
二四	十三行目	約・南北	南北約
二八	一行目	困難を極めたが、	困難を極めた。
三六	十六行目	遊環の	遊環は
三八	第十三圖解説	陶壺	陶壺
四〇	十三行目	急に低くなり、	急に低くなつてゐる。
五一	十五行目	圖版第五四1・2例	圖版第五四下段二例
五三	註9)一行目	圖版五四1・2例	圖版五四下段二例
五三	註9)一行目	上水道工中	上水道工事中
五三	註9)一行目	銅壺	青銅壺
圖版四六	解説		

本文目録

序	説	一
一	第一號墳	四
二	第二號墳	八
三	第三號墳	一一
四	第四號墳	一六
五	第五號墳	一八
六	第六號墳	二二
七	第七號墳	二七
八	第八號墳	三三
九	第九號墳	三五
十	第十號墳	三九
結	論	四四

挿圖目次

第一圖 第一號墳出土太刀及刀子……………七

第二圖 第一號墳出土高坏……………八

第三圖 第二號墳出土土器……………一〇

第四圖 第二號墳出土疏瓦(田中龜藏氏撮影)……………一一

第五圖 第三號墳出土盆及壺……………一四

第六圖 第三號墳出土埴(田中龜藏氏撮影)……………一五

第七圖 第三號墳出土疏瓦(田中龜藏氏撮影)……………一六

第八圖 第五號墳出土關石……………二〇

第九圖 第五號墳出土鐵鏃……………二二

第十圖 第六號墳出土盆……………二六

第十一圖 第七號墳出土石枕……………三〇

第十二圖 第七號墳出土石足座……………三一

第十三圖 第九號墳出土陶壺及青銅壺……………三八

第十四圖 第十號墳出土高坏……………四三

第十五圖 慶州南山出土高坏及器蓋……………四九

第十六圖 忠孝里出土骨壺……………五二

圖版目次

圖版第一 調査墳の位置

圖版第二 古墳群遠望

圖版第三 第一號墳第二號墳第三號墳外形實測圖

圖版第四 第一號墳石室實測圖

圖版第五 墳 發掘中の光景
石室出現状態

圖版第六 墳 高坏出現状態
石室全景

圖版第七 第二號墳石室實測圖

圖版第八 墳 棺外 臺觀

圖版第九 墳 棺蓋上の瓦列
調査終了後の石室

圖版第一〇 第三號墳石室實測圖

圖版第一一 墳 外 發掘中の石室内部
羨道内の瓦列

圖版第一二 墳 羨道内の瓦列
石室全景

圖版第一三 第一號墳第二號墳第三號墳出土遺物

圖版目次

圖版第一四 第四號墳第五號墳外形實測圖

圖版第一五 第四號墳石室實測圖

圖版第一六 墳 石室全景

圖版第一七 墳 石室、羨道、南半

圖版第一八 墳 羨道の石敷狀態、羨道の充塞石積

圖版第一九 第五號墳石室實測圖

圖版第二〇 墳 外、鐵線出土原狀

圖版第二一 墳 石室全景

圖版第二二 同 墳 石室内部

圖版第二三 同 墳 出土遺物

圖版第二四 第六號墳外形實測圖

圖版第二五 同 墳 石室實測圖

圖版第二六 墳 外、封土斷面

圖版第二七 墳 石室内部、石室全景

圖版第二八 同 墳 出土遺物

圖版第二九 第七號墳外形實測圖

圖版第三〇 同 墳 石室實測圖

圖版目次

圖版第三一 同 墳 外、羨道充墳狀態

圖版第三二 同 墳 羨道

圖版第三三 同 墳 石室内部、人骨出土狀態

圖版第三四 同 墳 出土遺物 (田中龜蕉氏撮影)

圖版第三五 第八號墳外形實測圖

圖版第三六 同 墳 石室實測圖

圖版第三七 同 墳 外、天井の外観

圖版第三八 同 墳 羨道

圖版第三九 同 墳 石室内部

圖版第四〇 第九號墳外形實測圖

圖版第四一 同 墳 石室實測圖

圖版第四二 同 墳 外、羨道充墳狀態

圖版第四三 同 墳 羨道

圖版第四四 同 墳 石室内部 (今關光夫氏撮影)

圖版第四五 同 墳 扉及闕

圖版第四六 同 墳 出土遺物

圖版第四七 第十號墳外形實測圖

圖版第四八	第十號墳石室實測圖
圖版第四九	同 墳 <small>外 羨道充墳狀觀</small>
圖版第五〇	同 墳羨道
圖版第五一	同 墳石室棺臺
圖版第五二	同 墳出土遺物 (田中龜熊氏及田野七之助氏撮影)
圖版第五三	慶州忠孝里出土綠釉骨壺
圖版第五四	慶州南山及忠孝里出土骨壺類

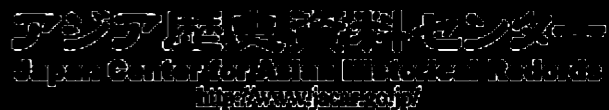
例言

一、本冊録す所の慶州忠孝里石室古墳の調査は、朝鮮古蹟研究会慶州研究所昭和七年度事業の一として行つたもので遺蹟は慶州邑上水道濾過池開鑿豫定地域に當り、邑當局は其の急速なる調査方を總督府に申請し、應て研究会の事業として遂行されるに至つた次第である。

二、調査は有光専ら事に當り、其間終始研究会幹事藤田亮策氏の指導を受け、又元慶州博物館主任諸鹿央雄、同館員崔順鳳氏等の助力を仰いだ事尠ならず、更に慶州邑長井上茂氏、同邑水道技師市成氏及び慶州工藝學校上原一夫氏等からも多大の援助を得た。

三、本文は當時の記録に基き調査者の稿する所であるが、成稿後研究員梅原末治氏及藤田亮策氏の校閲を経たものである。

四、圖版所收の寫眞は調査者の撮影に係るもの、外慶州田中龜熊氏京城田野七之助氏を煩らはしたるものがあり、又現場の寫眞中に京城帝國大學法文學部今關光夫氏の撮影に係るものがあるが、夫々記して負ふところを明らかにした。



慶州忠孝里石室古墳調査報告

朝鮮總督府囑託

有 光 教 一

序 説

〔圖版第一、第二〕

本遺蹟は慶州邑の西方凡そ一軒、西川對岸の一丘陵上に在る。此の丘陵は玉女峰の一支脈であつて東側は川に臨んで頗る急峻、北も又谿を入れて急傾斜であるが、西は丘陵緩きで殆ど起伏なく、峯つゞきには傳金庾信墓がある。又南方は長く緩やかに伸びた斜面で、十數基の古墳が此所に集つてゐる。今回調査したのはそのうち危殆に瀕したものの十基であつて、孰れも石室古墳であつたが、皆盜掘の厄に遭ひ、天井石を遺存するものは三基丈けに過ぎなかつた。従つて殘存遺物は少量であり、構造に就いても完全な状態を知り得ない部分が少くなかつたのであるが、各墳夫々に特徴があつて、その聚成を試みれば自ら本古墳群の性質が判り、延いて當地方に於ける同式墳墓の闡明に重要な寄與をなすことになつたのは欣快に堪へない。

抑々慶州は此處に強調する迄もなく、新羅の都として久しきに亙つて其の文化の中心地であつたので、他の種々の遺物遺蹟と共に當時の墳墓群が數多く残つてゐる。その古墳群のう

も慶州邑南部の平地、即ち路東里路西里皇南里皇吾里及び仁旺里に互る古墳群はその豪華な外貌と、金冠塚⁽¹⁾、金鈴塚、飾履塚⁽²⁾、瑞鳳塚⁽³⁾から出土した燦然たる遺寶とによつて特に著名な存在となつてゐる。然し乍らこれとは別に、慶州平野を圍繞する山丘、例へば南山、小金剛山、仙桃山麓及び普門里の高地等にも亦夫々大小多数の古墳群があるのであつて、而も此等のうちには従來の調査の結果に徴するに、前記平地部の古墳群とは構造並びに出土遺物に於いて可成りの差異を示すものが少くないのである。⁽⁴⁾ 然るに金冠塚以下の豪華墳を含む前者は、夫等の報告書に示された通り華美絢爛の遺寶を豊富に含む爲に、單に世俗的な興味のみでなく學界の注目をも専有し、當局の發掘調査亦此處に偏するの觀を呈したが、之に對し後者に就いての調査は頗る閑散な状態にとゞまつてゐた。然しこの跛行状態は考古學上より新羅を研究するに就いて、非常に遺憾とされてゐるところで、何れは後者に就いても前者同様基礎的調査と其の研究とが遂げらるべきである。此の點玆に報告する忠孝里石室古墳の發掘調査が貴重な資料たり得べきは言を須ひない。

今次の發掘調査は經費その他の都合で左表の通り二期に分ち行ひ第一期の調査は五月二十七日より六月十日に互り第一號墳以下第六號墳に至る六基を調査し、第二期はその後約三週間を経た七月四日に始まり八月五日に終つて、その間第七號墳以下四基の調査を遂行した。第一期の六基は本丘陵頂上近くに集つた一群であつて、慶州上水道瀝過池開鑿豫定區域内に含まれ、其の發掘調査は最も急を要したものであり、第二期調査の四基は本丘陵南麓に散在す

るが、右瀝過池を含む公園計畫地域内に相當し、亦早晚調査の要あるものであつたから、便宜此等に迄及んだのである。

古墳調査日表 (但埋戻復舊に要せし日数は除く)

古墳名	日	
	月	日
第一號墳	5	27
		28
		29
		30
		31
第二號墳	6	1
		2
		3
		4
		5
		6
		7
		8
		9
		10
第三號墳	7	4
		5
		6
		7
		8
		9
		10
		11
		12
		13
		14
		15
		16
		17
		18
		19
		20
		21
		22
		23
		24
		25
		26
		27
		28
		29
		30
第四號墳	8	1
		2
		3
		4
		5
第五號墳		
第六號墳		
第七號墳		
第八號墳		
第九號墳		
第十號墳		



〔註〕

- (1) 朝鮮總督府古蹟調査特別報告第三冊
(2) 大正十三年度古蹟調査報告第一冊

- (3) 史學雜誌第三十八編第一號
(4) 慶州地方の石室古蹟調査の結果は、朝鮮古蹟圖譜三及び朝鮮藝術之研究等參照

一 第一號墳

〔圖版第三、第六、第一三〕

(一) 發掘經過

丘陵頂上稍西寄りにあつて封土流失し、現高一米に過ぎぬ。その上中央が窪んでゐて、明らかに盜掘された事が判るが、墳表には芝草密生し、樹齡約二十年の松が數本生えてゐる。五月二十七日先づこの芝草を剥ぎ松を伐截して發掘を始め、其日のうちに調査の目的を達した。

南半から發掘を開始し、約三十分の後早くも南に開く美道の雙壁を見出して、漸次玄室の四壁の輪郭をあとづけることが出来た。天井石や、壁面上半の用材の一部は、顛落して室内に充滿した土砂中に點在してゐるが、此の落下した石材を整理してゆくうちに、玄室の北壁に沿つたところで、天井石の上に載つた鐵製太刀と刀子とを發見した。其後作業が進んで玄室の輪郭が明らかになつたのであるが、その間右の外遂に遺物を檢出し得なかつた。又一方美道を調査したのであるが、其の入口に於て石塊と土砂とより成る充墳堆積物のあるのを明らかにし、その内から相並ぶ五個の高坏を見出した。此等は共に後の攪亂を脱れたものである。かくて床の檢出を最後として全體の調査を終へた。

(二) 構造

以上の發掘經過が物語る様に本墳は早く盜掘の厄に遭ひ、天井石は剝奪され、石室上半も大部分破壊され、纔に下半を残すに過ぎない。

現在見る墳體は、直徑東西一二・五〇米、南北一一米、高さ一・五〇米に過ぎぬ。封土は別に特異な物ではなく、其の邊の山土をも用ゐたらしく、墳周は此の爲か稍低くなつてゐる様に見える。但し石室を包む部分と美道入口の前方部とは、赭褐色の特に粘質度の強い粘土をたたみこんでゐる。

石室は南面し、略方形の玄室は西壁を南に伸ばしてその儘美道の西壁とする簡單な形式のものである。

室の通じての長さは三四〇米であつて、玄室は東西二・一七米、南北約二米の廣さであり、美道は幅七一糎、長さ一米である。周壁の石積は最も下の段に長さ八〇乃至九〇糎の大きな石を据ゑ、上にゆくに従つて小形なものを依積みにしたものであるが、現在は最も高いところで下底から一米餘を残すに過ぎない。併し築成に當つて壁面を軽く内方に傾け、剛線が上方にゆくにつれて緩く内に彎曲した點が認められる。而して現状から推すとそれから上は板石を持送にして天井に到つたと覺しく、もとの高さは二米内外であつたらう。なほ此の室では漆喰の日張り等による補強補填工作の痕跡は全く無い。別に架構の上で玄室の南壁が美道へ曲る角に特に巨大な一本の石を縦に立てて柱としてゐることが注意せられる。此は美道を

中央から作り出す場合と同様構築上の一の作意であつて、玄室と羨道との境界をなす門構えの柱石に相當する。以上の石材は總て本丘陵の地盤をなす粘板岩砂岩であつて、主として切石を用ひてゐるが、此は後述の諸墳も亦同様である。

次に前述した羨道入口の充填物は、最前端から約四〇程程内に入る間を幅一杯に塞いだ石塊と土地との堆積であつて、現在約五七程の高さに残つてゐる。その外表は比較的無難作に積まれてゐるのであるが、内部は却々堅固で、強靱な粘土でかためてある。

石室の床は平坦ではあるが、正確に云ふと入口の方に向つて若干低くなつてゐて、奥壁下と羨道入口とでは二程内外の差が認められる。此の床は地山をたゞ平坦にした丈けのものであつて、石室は其の上に直ちに構築され、砂礫の敷填も漆喰の塗布も全然なく、亦棺臺の設備も無かつた様であり、塞板や扉の設備などの痕跡も認められず極めて簡単な石室である。

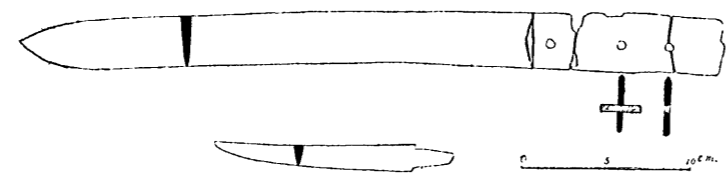
(三) 遺物

本墳は右に述べた様な次第で副葬品全般の原況は固より知り得べくもないが、而もなほ既記の如く玄室内に沈下してゐた一枚の天井石の上に鐵製太刀と刀子とを一本宛發見し、又羨道入口の充塞堆積物中からは五個の高坏を見出すことが出来たが、此は全く仕合せとする所である。

前者のうち太刀は鋒部を東にむけて東西に長く横はり、刀子は切尖きを南にして南北に横はり、兩者軽く接觸してゐた。その遺存原状は天井石の落下と共に多少は異動したと思はれる。

るが、後世の擾亂を受けた様にも見えず、構築當初此の天井石の上に載せられたと考へられるものである。

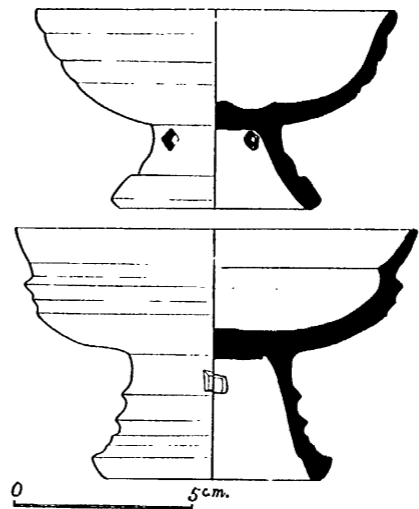
後者即ち羨道から出土した一群の高坏は、充塞堆積物の外界に面した部分の下床から略四〇程くらの所に殆ど同じ高さで五個相並んでゐたのである。夫等の遺存状態は、何れも正しい位置を保持して夫夫石塊の上に特に粘土で固定されてゐたから、後の擾亂を全然受けてゐないと考ふ可きである。



第一圖 第一號墳出土太刀及刀子

るが、此がもとの銀の痕跡であらうか。但し柄や鞘等の拵は全く残存しない。(第一圖)

(ロ) 刀子 全長一四三釐、太刀と同様鐵身のみを残すが亦甚しく錆びてゐる。形は外反り、で開は兩切込みになつてゐる。(第一圖)



杯高土田墳第一號 圖二第

(ハ) 新羅燒土器五個共略、同様な高杯で、その最も大形のものが、口徑一・四釐、高さ七・二釐、又最も小形のものが、口徑一・〇一釐、高さ五・六釐である。黝青色陶質の所謂新羅燒土器であるが、形は慶州邑南古墳群出土品に通有な高杯とは違つて、總體仕上りに輕快さ乏しく、皿部及脚部に繞らされた隆起帶も鈍重であり、脚は杯に對して短倭に過ぎてゐる等の特徴を持つてをり、且飾孔も纒に不整の方形又は菱形の小孔を二個或ひは四個相對に穿つにすぎぬのである。なほ孰れも蓋を持たない。(第二圖)

〔圖版第三、第七一九、第一三〕

二 第二號墳

(一) 發掘經過

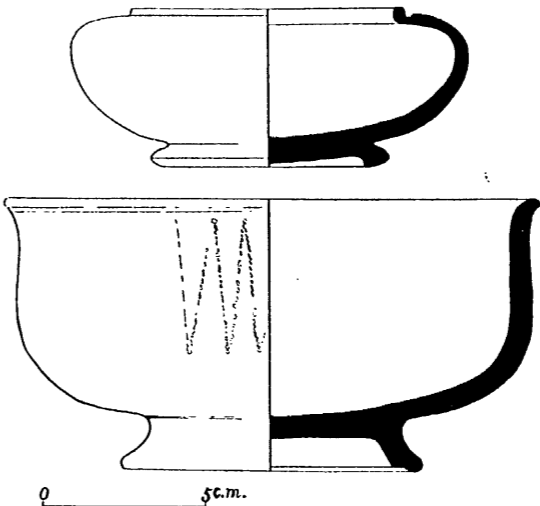
本墳は第一號墳の東南に接してゐる。盜掘に遭つて盛土脆弱となり、風雨の侵蝕を受けること甚しく、頗る低夷になつてゐる。盜掘坑は墳體の東半を抉り、現在直徑約三米餘の凹穴となつて残つてをり、而も芝草が密生し、倭松が散生してゐる。墳域の識別が困難なほどであつた。本墳の調査は後述第五號墳の天井石が巨大で、其の搬出に時間がかかつた爲、その傍ら行つて六月一日即日で完了したのである。調査は上記の盜掘坑を直ちに發掘坑として掘り、間もなく石室の上部に達し、之に沿ふて掘掘げ、廳て南に羨道を開く石室の全輪郭を明らかにした。石室は勿論上半を失つてをり、その用材と天井石との大半が室内を充滿した土砂の中に折り重なつて埋つてゐた。是等の石材と土砂とを除いてしまふと、棺臺が現はれ、その上には疏瓦及び平瓦が敷かれ、その間に入骨が散在してゐる状態が明らかになつた。又臺上及び床の上で土器一個宛を見出し、最後に粘板岩基盤から成る室底を検出して發掘を終了した。

(二) 構造

全墳體は其の基盤の傾斜のまゝ、西に傾き、從つて西端での墳脚は墳頂下三五〇米であつたが、墳體自體の隆起は精々一五〇米に過ぎぬ。なほ墳徑は現状では南北約九米、東西一二米内外である。

此の封土の中央に營まれた石室は南北の全長三・三〇米、内羨道の長さ一・一五米、玄室東西の幅二・四〇米、羨道幅〇・八〇米である。残存四壁漸く一米に過ぎず、羨道兩壁は更に低くて、辛ふじて室の下半が残つてゐるに過ぎない状態である。

室の構造は單純であつて、壁に塗喰の塗布さへなく、たゞ構造上舉ぐ可きものとしては玄室内に於ける棺臺がある丈けである。これは北壁に接して築かれた高さ約三三厘のもの、その大きさは凡そ玄室の三分の二に當り、南壁下との間に約〇五〇米の距りを保つ外は東西とも



第三圖 第二號墳出土土器

兩壁に接してゐる。其の構造は外側に面を揃へて偏平な割石を立て並べ、川原石や不整な割石でたゞみ、その隙間には細い石片を埋め、然る後上表に玉砂利を敷いたものである。又室の床は墳頂下一九〇米のところにあたり、岩盤を平たくしたもので、調査の際薄く粘土が上面を覆ふてゐるのが判つた。

(三) 遺物

墳頂下一四五乃至一六〇米の間、つまり棺臺上面に出現した瓦敷きの列は、主として疏瓦を用ゐ、略、東西に長く相連つて幾列にも並び、殆ど全面に互つてゐた。その敷き方は仰俯入違ひにして互に噛み合ふ様にしたものも見られたが、大半は攪亂されて様子が判らなかつた。この敷瓦の間から人骨の残片若干を得たのであるが、大腿骨と齒とが最も判然してゐた。齒は東南隅即ち棺臺と南壁との間の床上に散在し、

尺骨、上膊骨、肩胛骨等の破片もその附近から出土した。又大腿骨は臺上の北西瓦列の上下相合する間にあつた。この瓦と人骨片の出土原状から推定すると屍體は大體東枕で棺臺上表に敷きつめた瓦列の上に安置され、更にその上を瓦で覆はれたものと推察される。



第四圖 第二號墳出土瓦

副葬品としては臺上の南邊に近い所で、中央から稍、西に寄つて發見された一個の低い盒身がある。これは俯して臺の表面に積つた土砂の中にあつて破損してゐた。又羨道と玄室との間で口の廣い盃形の土器を發見したが、此れ又破損してゐた。共に新羅燒土器である。即ち殘存遺物は次の如くである。

- (イ) 新羅燒土器 二 個
- (ロ) 疏瓦 約二十枚
- 平瓦 約四枚
- (イ) 新羅燒土器 棺臺上から出た盃(圖版第一)

三中圖左は高さ四八厘、胴徑一二厘で、幅廣い器形であり、底部に臺を附けてゐる。臺底徑七二厘、無文ではあるが、其の最も膨んだ器腹の一部に、横長く細い紐が附着したまゝになつてゐる。之は器腹を繞つた帯でなく、たゞ焼成時に何となしに附着された粘土紐に過ぎない様である。他の土器は口縁を軽く外に反轉した盃形で、高さ八三厘、口徑一六厘、底徑

九一種を計る。其の黝青色は前者に比し淡く焼成もより軟弱で、上下に鎖狀點線を刻した鋸齒文を描き繞らしてゐる。(第三圖)

(ロ) 瓦 平瓦疏瓦共粗鬆な作りで上表に條線列の斑紋を持つものがあり、裏面には孰れも布目壓痕がある。疏瓦は一方に細まりたる半圓筒形のものであつて、その長さは大體三三種である。平瓦は孰れも破損して全きものがない。發見の位置から見て後述第七號墳の場合と同様足骨を覆ふてゐたのは疏瓦で、平瓦は胸腹部を覆ふてゐたものであらう。(第四圖)

三 第三號墳

〔圖版第三、第一〇—一三〕

(一) 發掘經過

第一號墳の西に接してゐる。封土は流失して低夷になり、中央に徑三米許りの深い盜掘坑があるが、其の穴は残存石室の一部を窺ひ見るものであつた。第一號墳終了後一部分を露出した天井石に據つて發掘してゆき、五月二十八日一日を以つて調査を了へたのである。

塚の表面には芝草が生え緩傾斜の麓の方には松其他の灌木が立つてゐるが、流石に深い盜掘坑には草さへもなく、たゞ流砂が漂ふばかりである。封土の流下によつて墳形は東に高く西に低くなつてをり、また山の傾斜の爲に東西に長くなつて歪んでゐる。

既に天井石の一部を露出してゐたので、その調査は容易なものと考へたが、實際は天井石や側壁の石積が粘土の様な土砂中に堅く埋まり、發掘は相當難事であり、而も出土した遺物は次

の如く僅少であつた。先づ玄室の東壁沿ひに遊離した六枚の埴を發見したが、秩序亂雑で何に用ゐられたものか全く不明の状態で出土した。次いで北壁沿ひの略中央の處で黝青色の新羅燒盆一個を見出し、又大腿骨等二三の人骨片を得た外、別に羨道南半を埋めた疏瓦の列及びその上に載つた新羅燒の壺等を順次檢出し、最後に岩盤を平に削つて粘土を敷いた室床と羨道とを調べて發掘を終了したのである。

(二) 構造

墳形は上述の様に基盤の傾斜なみに東に高く西に低く、墳高は西端で約三米、東端で一米足らずであり、直徑は東西約一三米、南北約一米の楕圓形である。

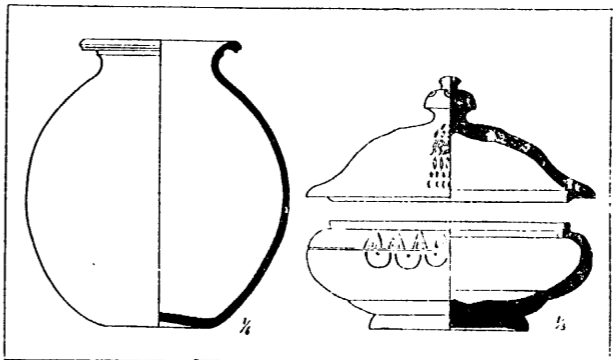
石室は南面し、西に偏在した羨道を持つたもので方形に近く、其の南北の全長三七五米、玄室南北二三〇米、東西二六〇米の廣さである。南壁の長さ一七三米で南に延びた西の壁との間に〇八七米幅の羨道を作り出し、羨道の入口は割石で充填され、粘土で堅く目張りされてゐる。室の架構は天井が既に失はれ、室壁また現在の壁高が僅かに一四〇米に過ぎない狀況であつたから原形は明確でないが、壁はやはり上方に行くに従つて軽く内側に傾いたもので、用材は例によつて割石を積んで居り、下底近くには比較的大形の石を用ゐる依積にしてゐる。又此等は岩盤を平坦にした上に構築されてゐること前きの二例と異なる所ない。現在室底は頂點より一八〇米のところ、それが羨道入口に向つて稍低下してゐる。

羨道は長さ約一四五米あり、兩壁は一三〇米乃至六〇米の高さを残してゐたが、天井石は皆

外れてゐた。其の入口には高さ五〇厘の扁平な割石を立て、塞ぎ、小割石を外からあてて支へ、なほ兩隅にも別に小形の石を詰めて是を不動のものたらしめてゐる。また此の塞石の直ぐ内側に美道の幅一杯に疏瓦が敷かれてあつたが、此の部分は原状のまゝを遺存してゐる。

(三) 遺物

遺物のうち六枚の埴は玄室東壁沿ひ、墳頂下七五厘前後より同一八〇米迄の間の土砂中に混在したものであり、また北壁の中段で出現した盒は、墳頂下一米許りのところで堆積した土砂の間に俯してをり、蓋は離れて稍、下位に在つた。共に原位置から動いたものであること勿論である。次に美道入口に瓦敷きと一緒にあつた壺は破砕して二群となつて出土した。一群は瓦列の上に載つてゐて、塞石に接した部分の中央に在り、他は瓦敷を北西に外れた床の上に在つて、前者は口縁部から底にかけての大部分の破片であり、後者は胴の一部であつた。この壺はその出土原状から推してもと瓦列の上に載せられてゐたと思ふ。



第五圖 第三號墳土壺及蓋

から推してもと瓦列の上に載せられてゐたと思ふ。美道塞石の直ぐ内側に敷かれてゐた瓦列はすべて一方に幅の狭くなつた疏瓦で、美道の幅

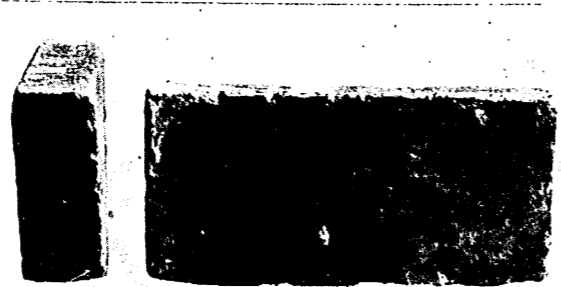
一杯に並べられてあつた。敷き方は北の一行だけ横手に三枚連ねられ、内側に對する限界をなすかに似てゐるが、その外は皆南北に長くして並べたものである。孰れも俯して二枚又は三枚重ねてあり、且つ皆その狭い方の小口を外方即ち塞石の方に向けて敷かれてゐる。

以上残存の遺物は左の三種となる。

- (イ) 新羅焼土器 二個
 - 盒 一個
 - 壺 一個

- (ハ) 埴 六枚
- (ロ) 疏瓦 一七枚

(イ) 新羅焼土器 盒は通蓋高さ約一〇厘の小形である。焼成堅緻で自然釉の滲出を見る。蓋には寶珠形の鈕があり、又型押文に似た陰刻文をめぐらしてゐるが焼成時の皺曲が多い。身は滑らかな仕上りで、肩部をめぐつて山形文列と圆弧列との幾何學文的圖様を帶狀に陰刻してある。其の圆弧はコンパス様の施文具で描かれたものゝ如く孰

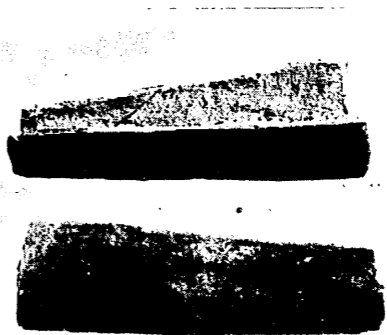


第六圖 第三號墳土壺

れも中心點を持つてゐる。

壺は高さ二六厘で稍、大形のものであるが、焼成は堅緻ならず、白灰色勝ちの黝色で全體に蔭

日状の壓痕があり、その上に轆轤跡の平行條線が良く残つてゐて、一見文様の如く見える。丸



第七圖 第三號墳出土瓦片の約%

底で、口縁は深く反轉してゐる。(第五圖)
(ロ) 埴 二四×一二二×四六、二四×二四五×一二六
×四二、二種の大いさである。胎土は淡紅色又は赭褐色で
上皮が黒味を帯び、堅緻である。内一枚に乳灰色の塗布
物が斑痕となつて残つてゐる。(第六圖)
(ハ) 疏瓦 長さ三三五、五種内外の半圓筒形のものであ
るが、その幅は一方が狭まり(約一二種)、他方に廣い(約一八
種)所謂行基葺の瓦である。上面は磨研され内面に布痕
が残つてゐる。(第七圖)

四 第四號墳

〔圖版第一四—一八〕

(一) 發掘經過

以上の三基から離れて、丘頂を南へ廻つた所にある。墳壘は現在なほ頗る高く残つて居るが、これも中央に徑四五〇米ばかりの盜掘坑が穿たれてゐた。發掘は坑を中心に進み、五月二十九、三十の兩日を費した。石室は羨道西偏在南面のもので、既に上半を失ひ室内には土砂と

落下した天井石や四壁上半の石材等が充滿してゐた丈で、遂に何も遺物らしいものを見出さなかつたのである。

(二) 構造

現在墳壘の直徑は東西約一〇米、南北約一五米、南北に長い楕圓形をしてをり、高さは南麓端で約三五〇米、北麓端で四米、而して東端では僅か二米であるに對し、西麓端では五米以上もあつて所在地の地形により南西に低くなつてゐる。

石室は方形に近い玄室と、西に偏在する羨道とより成る。羨道は玄室の西壁を延長して南に開いてゐる。通じての長さは三九二米あり、玄室の幅は二四三米ある。玄室内には東半に棺臺の設備があるが、此の臺は高さ四〇種あつて扁平な割石を積み、その石と石との隙間には小割石を充填してゐる。室内に露はれた側面には殊に大形の切石を用ゐ、眞直ぐに面取りし、臺上表と共に約五種の厚さに塗喰が塗られてゐるので、外觀は滑かた純白である。又臺の内面は礫と粘質強度強靱な粘土とを混せて固めたこと第二號墳と異なる所がない。なほ棺臺と共に玄室の床も亦厚さ二種前後に漆喰が塗布されてゐて、室壁全般が漆喰で粧はれてゐたものゝ様である。

次に玄室から羨道への隅角には一際大形の石を恰も門構えの如くに立て、をり、其の羨道に面した部分は壁面より約一〇種程突き出してゐる。而して上述棺臺の西側の外表側面を塗つてゐる漆喰は眞直に伸びて此の隅石の表面をも塗りこめてゐる。羨道には右の隅石の

外方に接して厚さ約一〇糎幅三〇糎乃至四五糎ばかりの扁平な石が羨道の幅一杯に据えてあるが、真直な外邊は兩壁に對しほぼ直角になつてゐる。此の真直な外側面と、凡そ二〇糎幅の空溝を距て、細長い割石の羨道充塞堆積がある。此の溝様空隙こそはもと扉石が立てられてゐた跡であつて、現にそれを固めてゐた漆喰の痕が溝の内及び左右の壁面に白々と残つてゐるのが注意に上つた。羨道の床には平坦な割石を敷き並べ、その外方の充填の石積は専ら長方形の割石を長手積にしたもので平均約七〇糎の間に高さ約一・一五米、十段位の石積を見るが、その間隙は粘土で堅く詰めてある。最下の敷石が割合に形の正しい滑かなもので、一見磚を敷いた様な觀を呈してゐるに對し、上に積まれた用石は細長く粗いものである。即ち元來羨道の床は比較的形の正しい割石を敷き並べ平滑に装はれてゐたのであつて、充填石積との別明らかである。

なほ實測の結果羨道入口では墳頂下三・二五米、玄室奥北壁直下で三・一五米あつて、南北兩端で約一〇糎の傾斜があり、入口に傾いてゐる。室床の漆喰の下は直ちに岩盤であつたが、亦粘板岩の様であつた。

五 第五號墳

〔圖版第一四、第一九—二三〕

(一) 發掘經過

此の第五號墳は高處から見ると新しい民墓と紛らう程の小隆起であつたが、南の斜面即ち

下方から見上げると前述の諸墳よりは寧ろ大きな外貌をしたものである。

五月卅一日から發掘し始めた。前記諸墳と同じく天井石は落下してをり、周囲の壁石も上方は崩壊してゐて室内を埋め、夫等の搬出は容易でなかつた。墳頂下約一米で室の北壁の上部を見出し、漸次掘り下げてゆくと沈下した天井石の上から二群の鐵鏝の束が現はれたが、その後は絶えて遺物の出土なく、その儘室床に到達した。然し調査の結果南面の羨道には玄室に接近して優秀な石闕を据え、又玄室の東西に二個の棺臺を備へた興味ある事實が明らかになり、調査を終了したのは六月五日であつた。

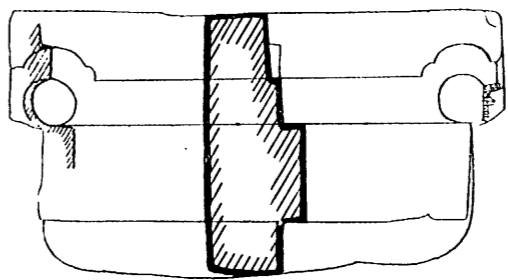
(二) 構造

墳壘の直徑は南北約一五米、東西一二米で石室は略その中央に位置してゐる。

室は方形に近い平面のものであるが、四壁の上半は崩壊し、最もよく残つてゐる奥壁の高さが約二・七〇米あり、他は二米前後であつた。室壁は底部から約一米迄は殆んど直立してゐるが、その上方は漸次内に傾き、北壁の如きは最も上の石が基線よりも凡そ五四糎許り内に出てゐる。蓋し斯の如くに持ち出して天井石を支へたものであらう。なほ石室は例によつて巨大な石を下底に据え、漸次上方に小形のものを積んでゐるが、玄室及び羨道を通じて塗喰の塗布のあとが濃厚に残つてゐた。

南壁の略中央に開く羨道への出口は、下に扉の闕を挟み上に一本の楣石を支へて、その幅一・一二五米、高さ一・二〇米の廣さである。その左右の柱石は高さ約一米の長さのものに、更に別

の石を足し、その上皮に漆喰を厚く塗つて一色に之を包んである。更に粗石は長さ一九〇米、約五〇厘角の一石であるが、此も漆喰が塗られて右の柱石の漆喰と一棊に連つてゐる。下底



0 10 50cm.

石関土出墳號五第 圖八第

の関石は純白の花崗石であつて、第八圖に示す通り前面に二段、後方に一段の縁出しを有する一石造りであり、且上表、側面共に美しく研ぎ出されてゐる。左右兩端に一對の臺座を造り出してゐるが、その前邊は弧線を聚めた裝飾的造り出しになつてをり、そこに穿たれた軸受の柄穴は左右共に直徑一二厘深さ四厘の圓滑な孔で、兩者の中心距離は一〇九米ある。此れに装置されてゐた扉は觀音開きの二枚扉でなければならぬが、今遺存しないのは残念である。それは凡そ五五厘乃至六〇厘幅に、一二五米以上の高さのものであつたらう。因みに東の方の柄穴には鐵滓が附いてゐた。

室内に於ける棺臺は二基であつて、夫々東西の壁に接して作られて居り共に同大同趣の構造である。即ち其の作りは外郭を比較的大形の割石で限取つて外側を揃へ漆喰を塗り床に對して垂直に連ねたもので、その内側は礫石及割石と、これを固める強靱な粘土で埋め、表面を漆喰で化粧したものであるが、その大部分は盜掘時に破壊さ

れてゐたのである。

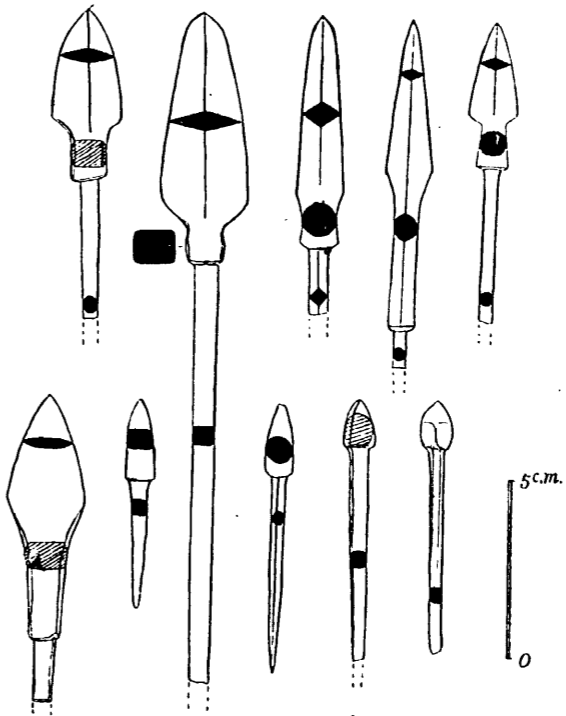
室床は粘板岩盤を平坦にしたところに、約一厘乃至二厘平均の厚さに漆喰を塗布したもので、右の東西兩棺臺は共にその上に設けられたのである。なほ床の漆喰の下即ち岩盤に接したところ、特に棺臺の下で多量の木炭片及びその粉末を見出し、且つ岩盤自體も一部分火に焼けた痕をとめてゐるのは、當時墳墓構築に當つて行はれた行事の痕跡とも見る可く、注意を惹いた事である。

最後に羨道は玄室の中央に開き、その方向稍西にふれ、上半を既に缺失してゐる。現在の石積は凡そ二段で、約八〇厘の高さに過ぎないが、下位の前部に据ゑられた石材は巨大で、方七〇厘のものがある。その入口には割石の堆積が約五〇厘位の高さに残つてゐるが、それは粘土で固められ、上半を失ひ乍らも、なほ同部に於ける充填設備の原状を示すものがあつた。

(三) 遺物

本墳に残存した遺物は、鐵鍬のみに過ぎなかつた。それは二東になつて出土したが、共に玄室の北壁に沿ひ先端を東に向け東西に相接して一枚の天井石に載つてゐた。此の天井石は玄室北半のもので、幸ひ室内に顛倒せず其儘僅に沈降した程度のものであつた。従つて鐵鍬群が斯の如く束をなし、秩序を保つて出現した事は、埋葬當時の状態から餘り動かされてゐない事を物語るものであつて、前きの第一號墳に於ける太刀及刀子の出土状態に相應するものと思ふ。

右の鐵鏃は全部で三十七本あるが、すべて莖を有し逆刺はない。そして凡そ二つの型に大別出来る。一は身幅狭く、且つ鏃のある所謂尖根式のもので、三十四本あり、そのうちには身の極めて細いものを含む他は身の幅の廣く且つ扁薄で鏃の認められない所謂平根式のもの三本である。先づ前者三十四本は更に大形のもの二十二本と小形のもの十二本とに分たれるが、大形の鏃は何れも判然たる鏃と鏃被とを備へ莖は太く長く、鏃形は大部分圭頭形であつて、鏃被莖の断面は方形、菱形、圓形等區々である。又短小のものは、身の断面が圓形で鋒へと尖つて銳利であり、莖の断



鐵鏃土山墳號五第 圖九第

面も圓形である。次に平根式のもの、その一本が、鏃被長く方形の断面をなすものであり、他の二本は鋒部厚く、鏃被を缺き莖極めて短いものである。

六 第六號墳

〔圖版第二四—二八〕

(一) 發掘經過

本古墳群中での東端に位し、丘陵東傾斜面の頂きに在つて眺望良く、眼下に慶州の平原を見下し、新羅の史蹟を指呼し得る場所である。而して本墳の東斜面はその儘丘陵の東急坂に連なるので、東側から見上ると頗る高峻に見えるが、實際の大きさは他と大同小異である。墳壘の西と南との斜面に深さ約二米餘の盜掘坑が穿たれ、西のものは徑四米の大いさであり、内容の亡失を容易に察せしめた。

調査は六月五日に着手した。表面から凡そ一米の間は大形の割石を含む粘土の堅い層であつて、發掘に困難を感じたが、これを剥がすと天井を失つた石室の上部に到達して、天井石を始め落下した石材で室内が一杯に埋められてゐる事や、石室が南面で、羨道は西に偏在することなども判つた。そこで室内に充滿した此等土砂と石材とを搬出し乍ら、漸次下方に掘り進めたのであるが、此の作業中羨道と玄室との界に一枚の扁平な巨石が塞ぎ石として立つてゐるのを見出し、次で又玄室内の土砂の下からは棺臺が現はれた。この棺臺は東壁の根元から室の中央に突き出た長方形のもので、南西北の三壁とは夫々距離があつて、些か他の諸墳とは趣を異にしたものであつた。

最後に棺臺の構造の調査から室底に及んだ時、次の興味ある事象に逢着したのである。

それは棺臺の直下で焼けて割かれた石片、多量の木炭並に少量の朱を検出した事と、別に玄室の四隅で一個宛の新羅焼土器の盆を見出した事とである。前者は第五號墳に於いても同様注意された現象であつた。後者は特に注目すべき事象で、四個の盆は床をなす岩盤を所要の大き丈け掘り窪めた穴(徑五〇糎、深二三糎)の中に入れられ、その上を粘土で塞ぎ床と同じに均されてゐたので、上方からは判らなかつたのである。四個孰れも同大同巧の盆で、そのうち東北隅にあつた一個は内に硝子勾玉一顆、瑠璃玉三顆及び銀板一枚を入れてゐて非常に興味を覺えた。かくて此等の遺物を採取して六月十日漸く調査を終了したのである。

(二) 構造

現在の墳型の直徑は東西約一五米、南北約一六米で、その高さは北及び西の端で二五〇米南と東の裾では約五米ある。

封土の上皮は前項に述べた如く、大形の割石を混入した堅固な粘土層から成つて、その厚さは約一米であつた。石室は墳型の略中央に位置し、美道の入口を稍西にふつて南面し、主軸の長さ約三・四〇米、玄室は約南北二・五〇米、東西約二・三〇米である。

現存室壁は西壁が最もよく残つてゐて、其の高さは一・八〇米あり、架構の石材は例によつて割石で、依積み積上げられ、上方にゆくにつれ内に傾き、西壁では最高點が基線より二〇糎許り内に入つてゐる。なほ用材には大きなものがあつて、下底に据ゑられた一個の如きは縦一・一〇米、横七〇糎内外もあつた。なほ四壁には漆喰が點々残存してゐる。

玄室内の棺臺は東壁直下から西に長く出て室の中央に横はり、南西北の各壁との間に夫々八〇糎三〇糎、四〇糎の距離を保ち、東邊八九糎、西邊八二糎、南邊二・二〇米、北邊二米の稍、歪んだ形で高さは三五糎である。構造は外周に比較的巨大な石を置いたもので、内部は堅緻な粘土と小砂利とで疊んである。上表と側面とは厚さ三糎平均に漆喰が塗布され平滑であり、またその最下部即ち床に接するところには特に強靱な粘土を敷いてその周邊の巨石を固着せしめる手法が認められた。前項に記した多量の木炭片と少量の朱とは棺臺の下底近くの粘土の中から見出されたのであつて、殆んど一面に互つてゐた。更に此の粘土を剝離すると、下は直ちに床をなす粘板岩盤であるが、此處に火で焼かれたと思はれる赭色の部分があり、亦其の邊りに炭化物の點在が注意された。而もその現象が棺臺の下丈けで、他の部分に及んでゐないこと云ふ事實は又特記するに足るのである。此等の事象によつて築造の際岩盤上で火が焚かれた事が推定され、前記第五號墳の場合と共に當時の葬法を稽える資料となるものであらう。

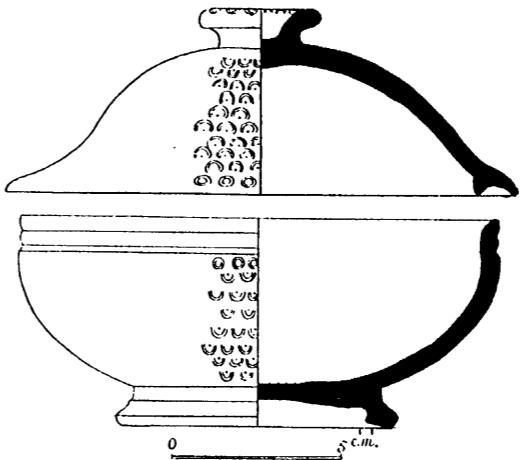
床は大體平坦で粘板岩盤の上に良質の赭褐色の粘土が敷いてあつて、前述の玄室四隅に於ける盆の入つた凹窪をその下に塗り隠す状態を示してゐた。

美道は長さ一三〇米、幅九〇糎あつて、玄室寄りには斜に立つた一枚の塞石(高さ一・四八米、幅九四糎、厚さ二七糎)がある。石は床底下に二糎乃至三糎喰込ませ、左右兩壁に觸れるところは厚く漆喰を塗つて固定してあり、なほその表裏兩面全體に漆喰を化粧塗りしてある。なほ美

道兩壁の石積は現存高さ八五厘のところ、最も高く、それは二段又は三段に長い石を積み重ね、外方程小形の石を用いたものである。最後に底部は玄室、羨道を通じて大體平均してゐたのであるが、玄室北端は羨道出口より約五厘高く、殆んど外方地表と同平面になつてゐる。

(三) 遺物

發掘經過の項に述べた様に遺物はたゞ玄室の四隅岩盤の凹所から出たもの丈けである。即ち左の如く表示される。



第十圖 第六號墳出土土盒

- (イ) 新羅焼土器盒 孰れも略、大さ(通蓋高一七五厘)の等しい同形、同文様の器である。器蓋には孰れも杯狀の鈕があり、文様は圓又は半圓の押型文的陰刻文で全面に施こされ、鈕の縁邊にまで及んでゐる。
- (ロ) 硝子勾玉 新羅焼土器盒 四個
- (ハ) 瑠璃小玉 瑠璃小玉 三個
- (ニ) 銀板 一枚

周圍に殊に丁寧に施こすなど、細部に變化を與へてゐる。此の刻文は蓋の上半と下半では半圓の方向を變へたり、又圓文を身の口縁の

- (ウ) 硝子勾玉 濃青色、長さ一七厘の小形のもの。作は粗末で歪曲がある。
- (ハ) 瑠璃小玉 二個は濃紺色、一個は綠色である。前者は平玉と云ふ可き形をしてゐる。
- (ニ) 銀板 短冊形で、現在の長さ約七厘幅一七五厘あり、稍、屈曲してゐる。極めて扁平なもので、兩端に幅稍、狭まり、中程少し狭まり、兩端の縁邊は弧形をなすが、殆んど圭狀に近く、其の形は當時の帶の端金具に似てゐる。

七 第七號墳

〔圖版第二九—三四〕

(一) 發掘經過

上來の六基は本丘陵の頂上近くに集つてゐたものであるが、本節以下の四基は麓の方に散在するものである。本墳はそのうちでも最も低い所にあつて、本丘陵の背が南へ長く伸びた端に當り、慶州邑より城乾里部落を経て忠孝里部落に通ずる路の傍に位してゐる。

封土の北半に徑五米餘の盜掘坑が穿たれてゐたので、七月十二日發掘開始と共に此を中心にして、上表から平坦に削つてゆく事にした。

廳て約一米も掘り下げると一坪にも餘る巨大な石が、斜に遺存してゐるのに逢着し、これが取除きに石工を四日間使用せざるを得ないと云ふ困難に遭遇した。この石材を取り出すと、下方から略、正方形をした玄室の上部が現はれ、ついで天井石も扉も完存した羨道が見出されたので、室内の調査と共に南方の羨道からも發掘を始めた。然るに羨道を塞いだ堆積物が堅

固で、其の取り除きに非常な困難を極めたが、此は本来如何に効果的なものであつたかを示す事にならう。而してその奥に鐵鑿一個を備へた右開きの一枚扉が閉ぢられてゐたのである。次に玄室の北半には棺臺が据ゑてあり、更に室底に堆積してゐた漆喰や土砂の中からは、石枕硬玉勾玉、水晶切子玉及び足座等の各種遺物を次々に發見し、又疏瓦、大體骨等を見出し、從來の諸例に比べて良好の結果を收め七月二十一日作業を終へた。

(二) 構造

墳體は東西の徑凡そ二〇米、南北約一六五〇米あり、南及び西の斜面末端は墳頂下四米で北と東のそれは二五〇米であつた。石室は封土の略中央に營まれ、羨道は室の中央から南に開いて居り、通じての長さ五・二八米である。玄室は南北三米、東西二九〇米の大きさで、正方形に近い平面をしたものである。

玄室四壁の現存高は、二・六〇米乃至二米である。架構は上來の諸例と同じく、もと全部に互つて厚さ一糶内外の漆喰を塗布してあつたが、今は殆んど剝落して室の底に折り重なつて堆積してゐたのである。尤も棺臺と羨道境の粗石及び其の左右の柱石等にあつては、厚く塗布されて今なほ割合に良く残つてゐた。

玄室内の北半に据ゑられた棺臺は、上面で二・二七米×一・二八米の廣さを示し、其の前(南)面に幅三一糶の段を作り添へたもので、構造は他と同様である。

羨道は玄室に向つて稍、斜につき、出口を西にふつて、玄室との界に扉を設けてゐる。その間

一杯に粘土と割石とが詰めてあり、更に入口から外方に廣く喰み出てゐるのである。この充塞堆積は、内側は扉の下半に向つて傾斜してをり、外方は一段低くなつて平均一・一五米の高さの段を設けてゐる。喰み出た部分の幅は羨道よりも廣く約一・七〇米ある。その上表近くには専ら割石を積み重ねてゐるが、表面は厚く粘土で被覆され、内方や下底近くは石の混入疎くなり、結局土砂と粘土とが中核をなしたものである。

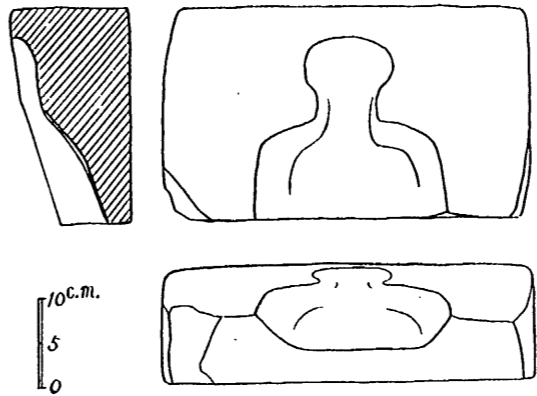
右の充塞物の下には、羨道の最外端を劃して埴形の割石が一行に並べてゐる。此は厚さ一〇糶の扁平な石四個を豎てに並べたもので、床上の高さ約六糶ある。またその奥の扉石の下には宛然扉の蹴放しの様に、別の四枚の扁平な割石、厚さ平均五糶、廣さ二〇—三〇糶が敷き並べられ、向つて右端の稍、大形の石には軸受けの孔を穿つて、扉の柄を受けてゐることが注意せられる。なほ此の敷石の内側に接して、入口同様扁平な割石を一行に豎て、並べてゐるが、此は扉の戸當りのつもりであらう。

さて扉は花崗石の一枚石、縦一・五五米、横一・二七米、厚さ一・三糶で、側面と両面の縁に近い部分には特に磨研を加へてある。向つて右邊が扉軸で、その下端に柄(長徑九糶)を造り出し、下の敷石に穿たれた柄穴(上徑一二糶、深さ約五糶)にはめてある。處が上端には柄がなく、柄のある可き角は寧ろ他の隅角よりもより圓味を帯びてをり、粗石と羨道天井石との接觸部に故意に凹窪を穿つて、その間に他の割石を嚙ませ、扉を安定ならしめてゐる。

此の扉には向つて左方稍、上位に座金附鐵鑿が装置してある。座金は三角形の歪んだ楕

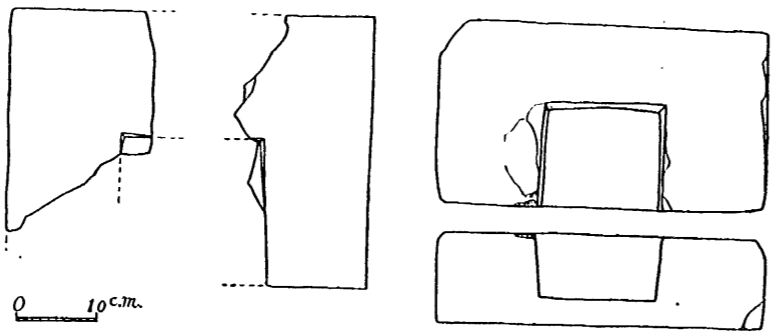
圓形鐵板で、鑿は外徑一六五種の正圓である。此の鑿は脚付の小鑿に通つて垂れたもので、脚は石扉に鑿孔された外擴りの穴(徑五種)を通り、裏面で折り曲げられてゐる。
 一 などは最後に室の床は、玄室羨道を通じて、全面粘板岩の基盤の上に漆喰を塗布したものであつた事を附記して置く。

(三) 遺物



枕石土出墳號七第 圖一十第

扱て本墳出土の遺物は總て原位置を動いてゐた。其の位置を挙げると、棺臺と扉との中間に石枕一個があり、棺臺の南邊に造り出された階段の上で硬玉勾玉一顆、棺臺北側の溝の中で水晶切子玉一顆、又棺臺と西壁の間の溝の兩端では二個分の足座と思はれる石製品を發見したのである。此の外上述の石枕に近く疏瓦で覆はれた足の骨二本と、裸出した大腿骨一本と、骨に疏瓦四枚の出土があつた。是等は孰れも本來の儘と思はれないのは勿論であるが、石枕と足座の出現位置の關係、並に足骨が専ら西方に寄つてゐたこと等からして、遺骸がもと東枕に葬られたとする推測を加へしめるのであり、更に元來一屍に一個の筈の足座が後に述べる様に大さの違つ



座足石土出墳號七第 圖二十第

た二個であることから、少くも二個の屍體が埋葬されてゐたことが察せられる。勾玉、切子玉等は勿論それ等に佩用させてあつたもの、殘存品であらう。又床上にあつた足の骨のうち、疏瓦を以つて覆はれたまゝのものは、餘り原位置を動いたと思はれないから、床に置かれた屍體もあつた事が推定される。

本石室出土の遺物は今次調査した諸墳中最も多數であつて、左に表示する如くである。

- | | | |
|-----|-------|-----|
| (イ) | 石 枕 | 一個 |
| (ロ) | 石足座 | 二個分 |
| (ハ) | 硬玉勾玉 | 一個 |
| (ニ) | 水晶切子玉 | 一個 |
| (ホ) | 疏 瓦 | 八枚 |
| (ヘ) | 扉 | 一枚 |
| (ト) | 扉の鑿 | 一個 |
- 次に夫等の略解を加へることにするが、(ヘ)と(ト)とは前

項に記したから、茲に繰返へさない。

- (イ) 石 枕 長方形であつて幅の最も広いところで五二糎長さは二五糎である。一方の面に頭形を削り窪めたものであつて厚さは頭上が最も厚く(一三二糎)中頃より基邊に向つて急に遞減してゐるもので石は三和土に似てゐる。
- (ロ) 石足座、一個は略完全であるが、他は二破片のみで正確には原形を知り難い。前者(第十二圖右)は四一×二四×一一四糎の大いさであつて、中央に一三三×一五×八糎の四角な窪みを作つて「コ」字形の函にしてゐる。内壁は下に僅かに狭まる丈けで殆んど直立してゐる。他(第十二圖左)はその一片から短邊の長さ(三五糎)が判る丈けであるが、それから推して少くも幅六〇糎で、前者よりは大型のものらしい。現存部は中心を缺き左右の兩端丈けであるが、凹窪は一八五糎の長さであつて、基邊から上邊に向つて淺くなつてゆくことが推定される。全體の厚さは一二七糎、中高に作られてゐる。石質は石枕同様共に三和土の様に思はれる。
- (ハ) 硬玉勾玉 乳白斑のある淡綠色で、丁字頭をしてゐる。全長は三四糎あつて形は完好であり、頭の孔は兩側から穿孔されてゐる。
- (ニ) 水晶切子玉 六角形で孔は片側から穿たれ、太い方の孔端は一部脱落してゐる。長さ二二糎、幅一四—二二五糎、透明體である。
- (ホ) 疏 瓦 八枚共一方の幅が廣く、他方に狭まる半圓筒形で、表面に篋磨きの痕のあるものがあり、又平行條線を有するものがあるが、内面には布目壓痕を見ない。又必ずしも總てが

完全ではない。長さ三三糎、幅廣き方が一八糎、狭き方が一二糎前後の大きさである。

八 第八號墳

〔圖版三五—三九〕

(一) 發掘經過

本墳は第七號墳の東北方約二〇米の稍高い位置に在る。墳壘は中央東北寄りに一五〇米許りの深さの盜掘坑が穿たれてゐる外、別に形の歪みはない。發掘は七月四日に着手して上表から右の盜掘舊坑を中心として掘り下げたが、天井石が幸にも完存してゐて、階段狀に割石を積んだ石室上部の外表が現はれて來て興味を惹いたのである。なほ封土は頗る堅緻で紫色の粘土より成り、うちに粘板岩片が多量に含まれ、東半断面ではそれが疊み積まれた様な狀況を呈してゐた。一部の空隙から、内部を窺つて既に攪亂の形迹を認めたのであるが、天井石を動かすこと容易でなく、遂に羨道の開いてゐる南外側から發掘し直すことにした。即ち同部の扉石をなす粘板岩と、割石の閉塞堆積物とを除いて室内に入り各部の調査を遂行して、七月二十一日に終了したのである。

(二) 構造

東西一五米、南北一六五〇米の圓形の墳壘に對し、石室は稍南に寄つて南面して居り、其の羨道は西に偏在したものである。全長は三八〇米、室の幅は約二一〇米で、大體方形に近い。

此の玄室の東半は全く棺臺で塞がれてゐて、其の棺臺は上來の諸例と同様の作りの上に漆

喰で化粧されて居り、表面と側面は蒲鉾状に膨上つてゐる。玄室四壁の上部は持送り式に天井石を受けてゐるが、天井は扁平な廣い石を南北二枚合せに並べたもので、その高さは床上より約二・五〇米である。

羨道は南に伸びた玄室の西壁を西の壁として幅八〇厘米長さ一・二〇米に作られ高さ約一・二〇米で天井を完存してゐた。但し天井は二枚の巨石を横渡しにわたしたものである。入口を塞ぐ扁平な割石と粘土との築積物は、上は入口の粗石に接し、下は階段状に掘り窪められた羨道外方の地盤内に充ち、なほ幅は入口の兩側の外に喰み出し、全然隙間のない充填状態である。この割石積の内側は扉石との間に約二〇厘米の距離を保つて略、垂直に積み上げられてゐるが、前面は下端が約六〇厘米ほど出張つて、下膨らみに積まれ、なほ下位程大形の割石が用ゐられてゐた。

次に扉石は正しい意味での扉でなく、一枚の不整な長方形の扁平石を立て、四隅を粘土と漆喰とで閉ぢて固定した云はゞ單なる塞板に過ぎない。此の板石は奥の天井石に凭掛つて斜に立ち、また下底は幅五〇厘米の扁平な敷石に前面を抑へられてあつた。その敷石は羨道の幅一杯に互つてをり床上に高さ六厘米ばかり現はれてゐた。

なほ室床は頂點下三八八米で約四厘米平均の厚さに漆喰を塗り敷いて平滑に粧ふたこと、第七號墳に異なるところない。

要するに本墳は何等遺物の存するものがなかつたが、珍らしく天井部の完存した事を擧ぐ

可く他の缺を補ふものである。

九 第九號墳

〔圖版第四〇—四六〕

(一) 發掘經過

第八號墳より更に約一〇米東北方に上つた所に位置し、頂上東北寄りに深さ一・五〇米許りの盗掘坑を見る外、割合に形の整美な墳壟である。西側は本丘陵の斜面になつてゐるから、此の方面での高さは約六米ある。

七月十九日に發掘を開始し、三日の後、墳頂下一米弱の所で天井石の上部に達し、引續いて其の南方で羨道の天井石を見、漸次發掘を前面に及ぼした。羨道部では割石積み充塞部の奥に、青銅の環座金具のある二枚の石扉が閉めてあることが判つて、大いに力を得たのであるが、充塞堆積を除き天井石を外す等の難工事の後、はじめて此を開く事が出来た。

次に玄室には東半に一個の棺臺があり、其の東南隅と室壁との間の床から、略、副葬當時の舊狀を保つた青銅壺と新羅燒土器の壺とを得たのであるが、他方棺臺の西邊に接してナイフ、肥後守が出て来て、本石室が盗掘者の侵入を受けた事が明らかになつた。蓋し盗掘者は玄室の東壁南寄りの天井に近い部分の壁石を外して入つたものゝ如く、その部分に空罅があつた。

(二) 構造

墳徑一七米の略、正圓に近い完好の墳墓で高さは約五米、封土は附近の山土であつて、別に大

きな礫石の含有等はない。石室は全墳腹の略中心に位置し、南面の羨道は西に片寄つて開いてゐる。全長は四・四四米あるが、うち玄室は東西二・二六米、南北二・五〇米の廣さの大體方形に近い平面で、其の東半に南北に長い棺臺が据ゑてある。第八號墳と同様に天井を完存し、四壁は下方に大形の石を置き漸次上方に至るに従ひ小形のものを用ゐ、且つ持造的に傾かせて上に二枚の石を南北に互してゐるが、地盤から二・五〇米の高さである。棺臺は長さ約二米、幅八六糎、高さ床五四糎で、上面の周縁は凹味を持ち、全面漆喰を厚く塗つてある。其の構成は例の如く切石を用ゐてゐるが、その上側に多量の良質な粘土が敷いてある。

羨道には上來の諸例と同様な充塞堆積物があるが、それは前後の長さ二・二五米で、外方に一・二〇米餘喰み出すと云ふ大袈裟なものである。羨道部の高さは一・五〇米であつて、天井石は三枚を横渡しにしてある。此は前方のもの程巨大で、最も奥に在る一つは玄室入口の粗石との間に、そこに装置された扉石の上端を保持してゐた。此の扉には上端に軸を造り出してゐるが、粗石には此に應ずる納穴がなく、他の割石を噛んで固定せしめられてゐるに過ぎない。次に二枚の扉は共に略同大、高さ一・二〇米、幅凡五〇糎、厚一〇糎、同巧のもので花崗岩製である。長い一邊には夫々上下に高さ五糎乃至一〇糎、直徑約一〇糎の納を造出して軸を象つてゐる。此の扉で注意を惹くのは青銅製の游鑿(座金附)を備へてゐること、其の座は八瓣の複連瓣を象つた秀れた鑄造の作品である。座の直徑八五糎、游鑿の外徑四四糎乃至三四糎の圓形中實のもので、座金具連瓣の中央に他の青銅鑿によつて垂下してゐる。脚は鐵製で二つに

曲り、別の青銅製筒によつて緊縛されて扉を貫き、其の先端は折り曲げられて扉に固着してゐるのである。

次に闕は同じく花崗岩の一石で造られてゐて、左右の幅一米(高二・二一糎)で、両端には納穴深さ二三糎があり、なほ別に高さ一〇糎の戸當りも造り出されてゐる。元來地盤上に据ゑ、床塗りの漆喰で固定されてゐたものの様であるが、天井部に加はる土壓は、扉を傾けてゐるので、闕石も亦後に傾き前がはね上つてゐた。

室床は厚い粘土と玉砂利の混淆層(厚さ一三糎平均)で、その上皮に漆喰を張つてゐるが、その下は緒く焼けた岩盤(粘板岩)の岩層である。羨道の床は玄室の床と一面であるが、羨道の戸口の岩盤が一段低く掘り窪められてゐるので、従つて此の部分の塗布層は厚くなつてゐる。

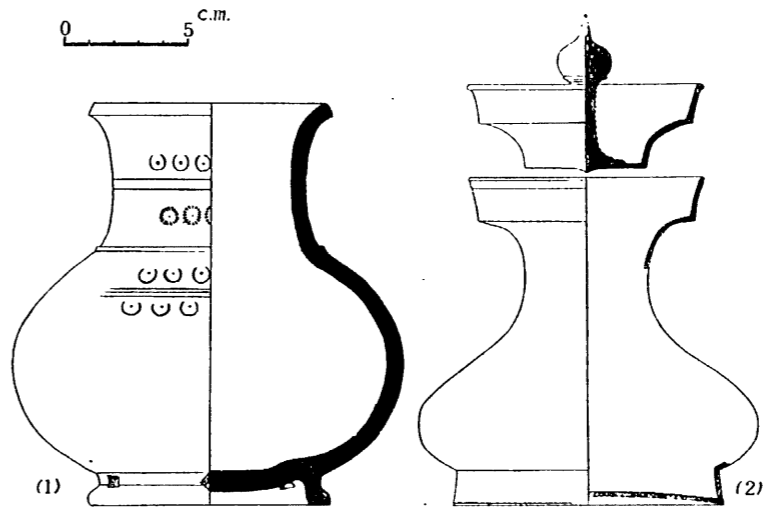
(三) 遺物

遺物としては僅に青銅製の壺と新羅焼土器の壺との二者を殘存するに過ぎなかつたが、其の出土状態は舊狀のままであつた。即ち玄室の東南隅に當つて、棺臺南邊と室壁との間に出來た溝様の空處中、最も南に當つて、そこを満たしてゐた溜土の中から正しく並んで出土したが、青銅壺が西に、陶壺が東にあつて、青銅壺は蓋をしたまゝ出現したのである。

次に二者の形狀を擧げよう。

(イ) 青銅壺

通蓋高一七糎(蓋高六・三五糎、身高一三・六糎)で、蓋身共に夫々特色ある形をした珍らしいものである。蓋の形



第九號墳出土陶土盒(1)及青銅壺(2) 第三十圖

は杯形とでも云ふ可きもので、器の中央に長い棒状の鈕を直立させてゐるが、それは蓋の周縁よりも高く二八厘出てをり、其の頂は寶珠形をなし柱形の部分は蛇腹状に作られてある。蓋周は身の口縁に正しく内被せをなすものである。身の大きさは高さ一三六厘、口徑九七厘、底徑一一二厘で、薄い器壁(厚さ〇三厘)のものである。その形はよく安定を得たもので、頸から肩にかけての線は滑らかに低く垂下し、底上三四厘の邊りで最も膨んだ(直徑一三八厘)腹に移つてゐる。器底の外観は、あげ底に見えるが、實際は内腔最下面に及んだもので、興味ある構造を示す。器の裝飾は鈕に於ける意匠の外は口縁外周底部外周に淺く細い刻線が繞らされてゐる丈の簡素なものであるが、形態は良く整つてゐる。

(ロ) 新羅燒土器 壺(高さ一六六五、口徑九五五)

胴部に圓味を帯びた有頸の壺で、底には三個の菱形透孔を配した高臺が附いてゐる。頸と肩とに條線と小花形小圓弧とより成る文様帯をめぐらしてゐるが、それは押型及びコンパス様の施文具を以てしたものである。燒成堅緻、褐色の吹出し釉が點々と滲出してゐる。石扉闕及び扉鐵座金具は亦遺物として擧げられるが、構造の項に記述したから此處では省略に從ふ。

第十號墳

〔圖版第四七—五二〕

(一) 發掘經過

本墳は本丘陵東急斜面上に位し、第六號墳同様眺望の最も佳い場所にある。墳壘は東西に長い楕圓形で、其の東斜面は丘陵の急坂と區別し難く、頂部に近い所に深さ約二米の盜掘坑が穿たれてゐた。

第八號墳及び第九號墳に引續いて七月二十二日に發掘を開始し、頂部から平らに掘り下げて行つた。封土は從來のと變るところなく、翌日は天井石の上端に到達し、石室がほぼ原形を遺存する事を知つたので、二十三日から東側を發掘して羨道の開門に當つた。然るに羨道は頗る長いもので、封土の東邊から始まり、それを辿つてゆくと、玄室に近い部分に天井石があつて、粘土で固めた割石の堆積が同部を充塞してゐるのを認め、更に此を除くと、戸口に一枚の扉石が現はれた。玄室内の調査は先づ二五種内外の厚さに堆積した土砂を除去するにあつた。

が、なほ前半の中央部には土砂が圓錐狀に堆積してゐた。其の浚渫作業中陶盒一個分、高坏二個と、金製帶金具一個を發見したのである。次に床と棺臺との上面に綺麗な玉砂利を敷き並べてある状態を明らかにして、八月五日に調査を完了した次第である。

(二) 構 造

墳徑は東西約一七米、南北約一六米、高さは西及び北の麓で約二五〇米、南及び東で約四五〇米ある。略、封土の中心に位置した石室は東南方に羨道を開いたものであつて、全長は七七〇米以上あるが、玄室は凡そ二三〇米平方に過ぎず、羨道が極めて長い。此の長い羨道の天井石は玄室に接した部分に只一枚ある丈で、而もそれは前に傾き充塞堆積物の上に載つた形をしてゐたのである。充塞堆積は上面と前面を割石で堅固に疊んだ粘土のかたまりで、高さ一〇米、長さ一・九五米、幅一・一〇米の大きさである。前面は前に緩く傾き、上面は平坦に作られてゐるが、割石は内に隠されて見えない。尤も右の堆積物と天井との間には、もと凡そ二〇糎位の空隙があつたものゝ如くである。この部分は羨道兩壁の石積の高さが、室相應に遺存されてゐるが、それより前方は急に低くなり、最も外端では左右の壁はたゞ野石一個を置く丈けに過ぎぬが、その幅は凡そ一・四〇米に擴められ、且つ兩壁端の間に石塊を二段に並べ互して羨道末端の限界を劃してゐる。

羨道と玄室との境界には一本の粗石を渡し、また下には扁平な切石を三重二列に積重ねて扉の闕としてゐる。粗石は半折して危く落下せんとし、闕の石積又極めて無雜作なものであ

る爲に中間にはめた石扉は羨道天井石に接して右の粗石に倚つて斜に立つて見出された。

扉は前例同様花崗石の一石造りであつて、厚さ約一二糎、縦八七糎、横七〇糎、軸部にあるべき柄は高七・三糎、徑八糎のものが、一個造り出されてゐる丈けである。此の扉はその幅が羨道の同部に較べて一五糎以上も狭く、従つて其の間に出来た隙間を塞ぐ爲に向つて右側に別の割石五個を詰め、これを粘土で固め、漆喰で上塗りしたものである。而してその柄の造り出しは唯一個で、而もそれは下邊の向つて左方に突き出してゐる爲、開閉の用をなさず、又上邊と左及び下底の縁邊は磨研されてゐるが、向つて右方の側邊は打割られた儘の粗い面である。更に向つて左方稍、上位に一箇の鑿を着けてゐるが、其の位置からすると扉は右開きであるべきに係らず、軸の造出しは前述の如くであり、且扉の装置に當つては羨道の幅に足らず、前記の如くその間隙に割石を嵌入して塞いでゐる。以上は、要するに此扉が他の扉石を半截した一枚の塞板に過ぎぬ事を示すのであつて、興味ある事實と云はねばならぬ。

略、方形平面の玄室の奥には棺臺が一つ横置きにされ、殆んど室の半ばを占めてをり(長一・九
高三・八糎)構造は他の諸例と大差ないが、上面に玉砂利を敷き並べ、其の臺表周縁の漆喰が帶狀に玉砂利面を圍んでゐるのは際立つて綺麗で注意を惹いた。天井はたゞ一枚の巨石を互してをり、此を戴く周壁は大形の石を下に据え、漸次上方に小形の割石を持送的に積むこと他例と同様であるが、積み方は極めて無雜作で、壁面の入出可なり多く、奥壁の如きは弧狀をなして内に張り出し、棺臺との間に殆んど隙間がなくなつてゐた。壁面には殆んど漆喰の塗布なく

粗い石の素地をその儘露出してゐた。

室床は天井下二、一米の所にあつて、美麗な玉砂利徑七糎乃至三糎の圓滑なるものを敷きつめてゐるが、それは地盤に直接敷かれてゐる。此の地盤面には玄室部と羨道とで高低の差があつて、玄室が一段高く且つ平坦に均らされてゐるに對し、羨道は一段低く削られて漸次外方に傾斜してゐたのである。

(三) 遺物

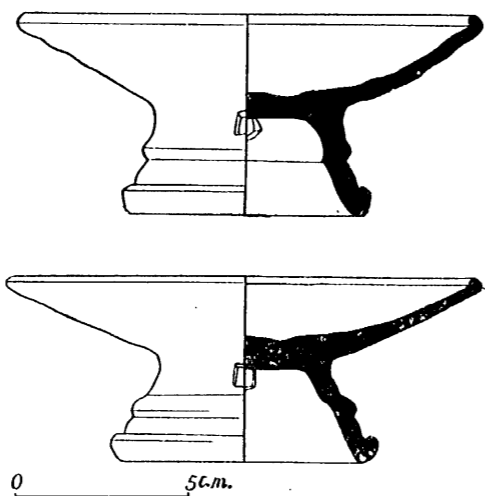
室内に遺存した副葬品は、水氣を多分に含んだ溜土の堆積中であつたもので、先づ金製帶金具一個は玄室前半の床上稍北に寄つたところで檢出され、又棺臺と北壁との間で陶質の高坏と壺とが一個宛並んで出現した。但し此の壺の蓋は游離して室の東南隅で見出され、又別に東北隅で破損した一個分の高坏を採集した。

右のうち相並んで出た高坏と壺とは恐らく原位置の儘であらうが、他の遺物は本來の状態のままとは言ひ難い。蓋し調査の經過の條に記したところから見て、盜掘者は天井石を動かして内部に侵入し、遺物の大部分を掠めたものであらう。

以上遺品二種と扉の座金具とに就き簡単な解説を加へよう。

(イ) 新羅燒土器 三個(蓋一個、高坏二個) 蓋は黝黒色陶質の器で、通高一、三、二糎、身の口徑一、五、三糎ある。蓋身共に二重の小弧を連ねた横帶文様を全面に施してゐるが、其の單位はコ、ンパス様施文具によるものゝ如く、何れも中心點を有つてゐる。底は上げ底で、蓋鈕は寶珠

形をなす。高坏は二個共同大で、廣口の坏部は扁平に見え、文様無く、たゞ脚と坏部との間に小方孔二個を相對に穿つてゐるに過ぎぬ。うちの一個の坏部には轆轤廻轉の際につけら



第十號墳出土高坏 圖四十四

れた無雜作な隆起帶を有し、脚にも下底と中ごろとに同じく隆起帶をめぐらしてゐる(六糎口徑、一、三、七糎) 他はたゞ脚部に隆起帶を作り出した丈けのもので、高さ五、五糎、口徑一、三、八糎ある。

(ロ) 金製鉸具 全長二、五糎で極めて小形のものであるが、留鉸に至るまで鮮やかな金色の總金製品である。帶を噛む部分は舌形であつて、深さ約一、二糎の扶入が作つてあり、これに兩留の鉸が貫通してゐる。鉸部は楕圓形で、その舌は先端鉤爪状に作られて五角形に削られ、基部は釘に通つて今なほ自由に動く。

通じて整形の爲の削抉磨研のあとが見られる。

(ハ) 青銅鑲座金具 簡單な鑄出しと粗奔な刻線で鬼面を表現し、鑲を其口に噛んだ貌を象つてゐるが稚拙なものである。座板の直徑一〇、二糎、表面は軽い突面をなし、裏面は平坦であ

る。顔はたゞ鼻と目を鑄出してゐる丈けで眉鬚等は刻線で描かれてゐる。游環は直徑一
寸で口に銜へられた形相を示して鼻稜の下に懸り、別に鐵の小環を通じて座に装置されて
ゐる。此の小環は元來脚付のもので座金を扉に固着せしめてゐたが、取り出した時には腐蝕し
て環が直ちに脱落した。なほ環は上向きになつて出現してゐる。

結 論

以上各墳別に記述したところを綜括的に概観し、其特徴を指摘し、以てこれが墓制史上に占
める位置を考察して結語とする。

今次調査の諸墳は、全部横穴式石室を主體とする圓墳であつて、石室の平面形は墳壘に對し
略中央に位し、墳底は岩盤を平坦に削つて作られ、墳壘の基線より下位に在る。石室は方形の
玄室と狭長の羨道とより成り、玄室の天井部は持送式の架構である。最初の三基の外は玄室
羨道共に周壁及床を漆喰で塗り、石材の面を其下に隠してゐる。玄室内の装置で著るしいの
は棺臺で、第一號墳及第三號墳を除いて皆之があり、その多くは表面に床や壁と同様漆喰を以
て化粧塗りしてゐるが、その方向位置は各墳各態で別に定則なく、築墳の際に自由に定めてゐ
たものである。次に羨道は第十號墳以外皆南に開いてゐるが、是は所在斜面が南面してゐる
爲に外ならぬ。その玄室に對する位置は、中央から然らざれば西に偏在し、玄室の西壁の延長を
その西の壁としてゐるものが多い。入口は單なる板狀の石又は扉で閉塞し、其の外側を粘土

と石積で堅固に詰めてゐる。但し扉があつてもそれは既に形式化したもので、開閉の出来る
ものでなく、粘土や漆喰で口張りして、永久の閉塞を目的としてゐる。即ち第七號墳第九號墳
の例を見るに軸を象る柄を軸請穴に嵌めて立つてゐる乍ら、上端には柄の造出しなく、又あつて
も楣石との間に小割石を噛ませられて固定し廻轉の用をなさず、その甚しきは第十號墳の例
で、單なる板狀の塞石の装置と撰ぶ所がない。又石室の用材は粘板岩と花崗岩であるが、共に
本丘陵を構成してゐる岩石であるから、石材の運搬には困難しなかつたであらう。そして大
部分には粘板岩を用ゐたゞ扉闔又は楣石等の人目に觸れ易い要所にのみ花崗石を用ゐて其
の美麗な白い面を有効に使つてゐる。

以上の構造に於いて特に根本的な通性として摘出されるのは、方形の玄室と狭長の羨道よ
り成る横穴式石室であると云ふ事であつて、玄室の天井が比較的高い持送式の架構である事
も是に隨伴した特徴であらう。此の形式は從來調査された任那其他南鮮各地に多い矩形の
石室を主とするものとは顯著な對照をなすものであり、又慶州邑南古墳群中に多い竪穴式木
槨墳とは構造上殊に對蹠的な相違を示してゐるが、要するに高句麗、百濟等にも見られる外來
の形式である事は否定し得ない。勿論今は是等石室墳の發達變遷を詳論する時機でないが、
然し現在の調査例だけでは石室の構造のみを以て時代を律するのは困難な状態にあるので、
出土遺物其他の事象の示す所を援用せねばならないのである。

遺物埋葬状態は盜掘により大半攪拌されてゐる爲め、その原状を確め難いが、残存遺品中な

は當初の位置を示すと思はれる若干の例があつて、ひとり本群のみならず、當地方石室墳全般に通じての埋葬原状を考察する上に参考となる可きものがあつた。例へば天井石の上に鐵利器を置いた例(第一號墳第五號墳)をはじめ、羨道部に於ける遺物副葬状態の明らかな例(第一號墳第三號墳)或は瓦葺人骨の出土例(第二號墳第七號墳)等がそれで、第一例は邑南木榔墳にも往々見られ、避邪の意味を持つものであらうかと思はれるし、第二例は充塞完了に前立ち、最後の供物を捧げた悲しき名残と察せられるが、斯様な出土例は亦、他の古墳群でも知られてゐる埋葬法である。又第三の例は多少その原位置を動いてゐたとしても、當時の特異な葬法を窺ふものとして、擧ぐ可く、兩足は夫々疏瓦で被覆され、大腿骨にまで及んでをり、平瓦は専ら胸腹部に載せられてゐたと推察される。當地方に於いて同様の疏瓦平瓦を石室墳より出土した例は既に度々報せられてゐる。更に特異な出土例として記憶すべきものに、第六號墳の盒及盒中の玉類の出土状態がある。而も是は玄室の四隅の岩盤を掘窪めた穴の内に一個宛入れであつた丈けに原位置の儘であることに疑ひなく、其藏置法が後述の骨壺に似て奇とすべき上に、その一個の内に銀板と玉類とを入れてゐた事は、かの佛塔中に納められた舍利盒の出現事象に似て佛敎的葬法を觀取せしめるものがある。

又今次調査の諸墳の遺物は、各墳共盜掠に遭ひ、失はれた部分の方が遙に多いが、一括してみると、なほ各種のものを含み、容器(高坏、壺、鉢、利器、太刀、刀子、鏃、裝身具)、勾玉、切子玉、丸玉、鉸具、銀板、或ひは埋葬用の石枕、足座、瓦埴及び扉の銀座金具等各種に互り、石室墳遺物の調査としては割

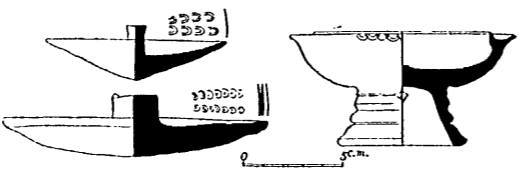
合に良好の結果であつた。而して右のうち第七號墳出土の勾玉、切子玉と第一號墳の太刀、刀子及第五號墳の鐵鏃は、慶州邑南古墳群中の堅穴式積石木榔墳(以下單に邑南木榔墳と稱す)の出土品と全く同趣にして形式の區別さへ認め難い。又第六號墳出土の瑠璃丸玉、銀板等は形稍小にして粗雑なるも、是とは特に區別のない同類のものである。之に反し第七號墳より出土した石枕と足座は、邑南木榔墳より絶えて見出された事のない特殊な石製品で、慶州では皆て西岳里石枕塚其他より同趣のものを出してをり、又高句麗及び百濟の石室墳中にも石枕の出土したものゝある事が報せられてゐる。蓋し前述石室の構造自體の示現するところと共に、麗濟より傳來せる葬法の流行を證據立てる遺品であらう。

然るに今次出土の土器類中には同じく新羅焼と稱すべきものであり乍ら、邑南木榔墳出土の新羅焼土器と可成りの相違を示すものが少くなく、其間には特に考察す可き様式上の變遷が見られる。今顯著なる對照を求めれば次の如くである。先づ高坏たる壺たるを問はず、一般に邑南木榔墳出土品は大形のものでも輕快な出来上りのものも多く、焼成堅緻で大いさの割合に器壁が薄手であるに對し、これは通視して小形なるに係らず鈍重な趣を呈し、形に比較して厚ぼつたき感を受ける。例を高坏にとつてみるも、邑南木榔墳出土のものは脚高く裾を長く張つてすらりとした形態を示し、脚臺の透孔も長方形に穿たれのびやかであるに對し、第一號墳第十號墳出土の高坏は皿部に比し臺脚極めて短倭で、すんぐりした形となり、透孔も小間孔又は不整の小方孔に退化してゐる。又第九號墳の壺と同趣の臺付長頸壺は木榔墳か

ら多数出土し非常に大形のものがあるが、蓋は高く透孔の飾も判然とし、胴は球形に張つて頗る軽快な趣であるに對し、是れは蓋が極めて低く所謂高蓋に似たもので、透孔はあるかなしかの小孔に過ぎなくなつてゐる。更に第六第十號墳の盒をはじめ第二第三號墳出土の盒の器形は、數多い木槨墳出土土器の各種多様の形態の中にも見出せない新出のもので、第九號墳の壺の形と共に却つて慶州平野を圍繞する山丘に於いて屢々發見されてゐる彼の火葬骨壺のうちと同形のものを見出すのである。随つて文様に就いて言へば、同じく轆轤によつて成形されてゐる乍ら、邑南木槨墳の土器の多くが、篋や櫛齒様の施文具を以て轆轤の廻轉を利用して乍ら波状文や直線文を彫刻してゐるに對し、右第九號墳の壺をはじめ第三第六第十號墳出土の盒の文様は押型文的圖様の連續に終始し、圓弧又は重圈を連ねたもので、第九號墳の壺の如きは花形の施文具を用ゐた明らかな例である。而もその施文の部分が第六號墳及び第十號墳の盒では蓋身共全面に互り鉤の上に迄及んでゐる。是はその器形と共に木槨墳例に見られぬ裝飾であるが、實は火葬骨壺に於いては最も普通の遺方である。かくて器形文様共に今次出土土器の大部分が骨壺と同様式のものである事が明らかになつた。

而して上來邑南木槨墳出土品と對比した所以のものは、同古墳群が同じ慶州の地域内にあつて、最も學術的調査の行届いたものであり、其の營造時期の如きも概括的にはあるが六朝中期に推定され、新羅の半島統一に先立つ時代にある事が容認されてゐるから、實年代を示す遺品の全く無い今次調査墳の相對年代觀の據所を此處に求めんとしたに外ならぬ。其結果

高句麗百濟等よりの影響によると思はれる構造上の特徴並びに特殊な遺物を有するに係らず、其の出土品中土器の大部分が右の邑南木槨墳のそれから發達した新たな特徴を含んでゐる事が明瞭になつた。而もそれが慶州附近の山地に埋葬されてゐる



蓋器及坪高土出山南州慶 圖五十第

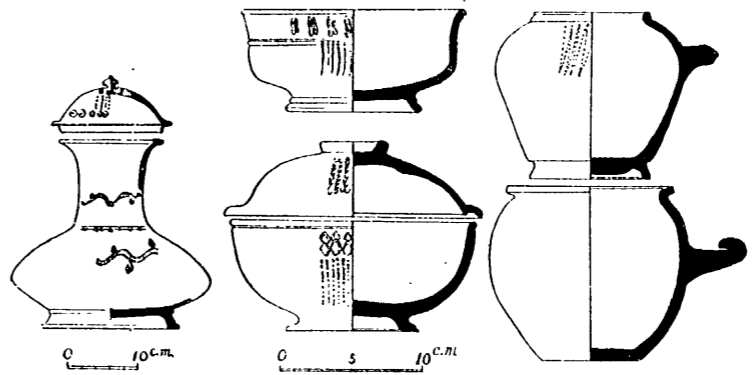
火葬骨壺に同様式のものを見出す事實は年代觀に就いて更に有力な示唆を増すのである。かく考へて來ると、第九號墳の青銅の壺は其の器形三國期の容器を見做れた目にはまことに奇異の形態で、寧ろ舍利瓶の中に同形式のものを見出すのみならず、其の蓋の特異な形は亦骨壺系統の土器の中に存在する事が注意に上るし、第十五圖第一第十號墳の高坪と相似たものが屢々骨壺同様山丘から單獨に出土する事に氣附く第十五圖。更に第六號墳の玄室四隅で岩盤を掘り窪めた坑中に盒一個宛を埋藏してゐた状態は所謂骨壺の出土狀況に髣髴たるものがあり、或は實際舍利を埋葬したものであるまいかと推測されるのである。

そのことと思はれる。その葬法に就いて最初に史書にあらはれるのは三國史記卷七の文武王遺詔である。當時既に支那に於いては僧侶の間に火葬が行はれてをり、四國の情勢より推して其の葬法が此頃新羅に及んで來たと解して支障はないのである。其後孝成王宣德王元聖

王の遺命によつて引つゞき火葬が盛行しつゝあつた事が推察されるが、右諸王を中心とする頃は、新羅の文化も漸く爛熟し、佛教崇尊の風漲り、その影響によつて行はれた火葬も亦此時代を盛行期としたと解して差支ない。骨壺は勿論此の火葬の流行によつて独自の發達を遂げ、其の三國期の土器に對する形態上の特徴をはじめ、其の上に押捺された文様の新羅統一期の瓦當文様や金具の模様と同趣なる事等右の考察を傍證する點が多々ある。又第九號墳の石扉を飾る鑲座金具の雄麗な造形は、亦新羅一統時代の様式を備へ、瓦當の文様等と軌を一にすることは最も容易に了解されるであらう。更に第十號墳出土の金製の小鉸具は、慶州九政里方形墳⁽³⁾の銀製の鉸具と特徴を同じくし、三國期の邑南木槨墳から從來出土してゐる鉸具とは形式を異にしてゐる。九政里方形墳は言ふ迄もなく、十二支神將彫刻の護石を繞らした新羅墳墓中、學術的調査を経た唯一の墳墓であるが、同じく横穴式石室墳であつて、格座間を彫刻した棺臺のある美事な石室を以て知られてゐる。其護石の彫刻に徴しても、又他の同様の墓相の諸墳との關係からも一統時代の營造たる事は疑を存しない。

かくて今次調査の諸墳は、其の出土品中に火葬骨壺と類似する容器を含み、また統一時代の特徴を持つた若干の遺物の存する事によつて、新羅の三國統一以後にその營造年代を比定して誤りのない事が明らかにされた。假令其の石室の構造が高句麗百濟に系統を曳き、又内に三國期のものと撰ぶところなき遺物を含んでゐても、結局此等は統一以前から以後にかけて同様の文物が繼續して行はれてゐた事を示すに過ぎない。

扱て以上は年代觀に就き縦の關係を考察して來たのであるが、最後に横の關聯を推測して見たいと思ふのである。然るに當地方の石室墳の調査が甚だ不充分である事序說中に申述べた通りで、殆んど相互比較するに足らぬから、特に濃ゆい親縁關係を見出し得た火葬骨壺を拉し來り、併せて概観するにとゞめる。慶州附近に於いて本古墳群と同様式のもので、從來調査報告されてゐるのは西岳里石枕塚等數基に過ぎぬが、盜掘坑から玄室を窺ひ得て同形式の石室と推定されるものは多數ある。序說でも述べた通り、慶州を取圍む山丘部例へば仙桃山麓に當る忠孝里及び西岳里の高地、南山一帶、普門里高地、明活山に續く丘陵或ひは小金剛山等に分布してゐる數は夥しいものである。然し此等が總て新羅一統期の營造とは思へないのであつて、中に統一以前期の石室墳のある可き事は、高句麗百濟の墳墓の形式、其他の考古學的現象及び當時の相互交渉の情勢に稽えて充分想像される。たゞ今次調査の石室墳を特に統一時代の營造と推定させたのは、實に其の出土品中に同時代の特徴を備へたものが多數存在したからに他ならぬが、この年代觀解決の鍵となつた火葬骨壺が、慶州附近では略、右の石室墳の分布區域内で出土する事實に氣付く。現に今回の發掘終了後、本丘陵頂上部に開鑿された慶州邑上水道濾過池の掘鑿並びに是に附隨した工事の際多數の骨壺が見出されてゐる。孰れも簡單に蔽置されてゐて地表下五十糎内外の所で單獨に出土し、圖版第五四一、二例の外は何等特別の埋葬施設を見ないが、殆んど同じ頃南山の砂防工事段切作業中に見出された骨壺類も亦同様であつた。⁽⁴⁾石室墳の厚葬にして多大の勞力を要するに對し、此は極めて容易な埋



第 六 十 圖 忠 孝 里 土 骨 壺

葬であるが、一般骨壺と本群石室の容器の大部分との親縁關係は前述の通りで、兩者の間に時間の距りを考へる事を許さない。即ち一方に石室墳に安置する鄭重な埋葬が行はれ、同時に他方では火葬されて骨壺内に藏置埋葬されてゐたのである。骨壺の中には釉をかけたり等した相當立派なものもある事であるし、此の相違は身分階級によるものと解するよりは、宗教的な關係に由來する葬法の差異と解す可きであらう。更に此等が共に邑南平野部の古墳群とは對蹠的な古居位置にある事は、墳墓の地理に就いて略一定した觀念が行はれてゐた事を示すに他ならぬ。

以上先づ本石室墳群の示現する特徴を列挙し、うちに統一時代のものと認定す可き種々の形相の存する事を指摘し、其の營造時期を新羅の統一時代に比定し、更に墓制史上に於ける横の關係にも些か言及したのであるが、他の石室墳との系列關聯に就いては甚だ漠然たらざるを得なかつた。これ全く慶州に於ける同式墳墓の調査

が、從來不行届であつた事に歸因するのであつて、現在の調査状態ではこれ以上の究明は望み難く、文化史上の價値は右の大體の年代即ち新羅統一時代の營造と云ふ事の闡明を以て足れりとせねばならない。若しこれを契機として、慶州の石室墳の調査が進捗し、序説中に述べた新羅墳墓研究に見られる跛行状態が矯正されるに到るならば、歴史や考古學の上にも重大な價値を加へることにならう。

〔註〕(1)朝鮮古蹟圖譜三の圖版一七八及び谷井濟一氏

慶州の陵墓(朝鮮藝術之研究所蔵)參照

又諸鹿央雄氏所蔵品中にも若干例を見た。

(2)高句麗時代之遺蹟圖版下冊參照

(3)昭和二年度古蹟調査報告第二冊所收の京畿道慶州郡梅龍里古墳參照

(4)朝鮮古蹟圖譜五及び齊藤忠氏新羅火葬骨壺考(考古學論叢第二輯參照)

(5)古蹟調査特別報告第三冊慶州金冠塚と其遺寶本文上冊、大正十三年度古蹟調査報告慶州金

鈴塚塚原塚發掘調査報告及び濱田耕作博士慶州の金冠塚等參照

(6)三國史記卷七文武王二十一年の條に依西國之

式以火燒葬云々とあり。

(7)三國史記參照、なほ三國遺事王曆第一の表に

は孝恭王神德王景明王の火葬に就き記載があ

る。

(8)大正九年十一月朝鮮總督府古蹟調査員の學術

的調査を経てゐる。有光十二支生骨の石彫を

繞らした新羅の墳墓(考古學叢第二十五號參照

圖版五四1、2は忠孝里上水道工中の發見で、夫

々上の土器ボ下の壺を覆ふて出土したもので

ある。又同圖上二段は南山の出土品で、添附の

開元通寶は同じく南山出土の片把手骨壺の内

にあつたが又年代推定の據所とならう。

(9)朝鮮總督府博物館圖鑒第一輯、本冊圖版第五

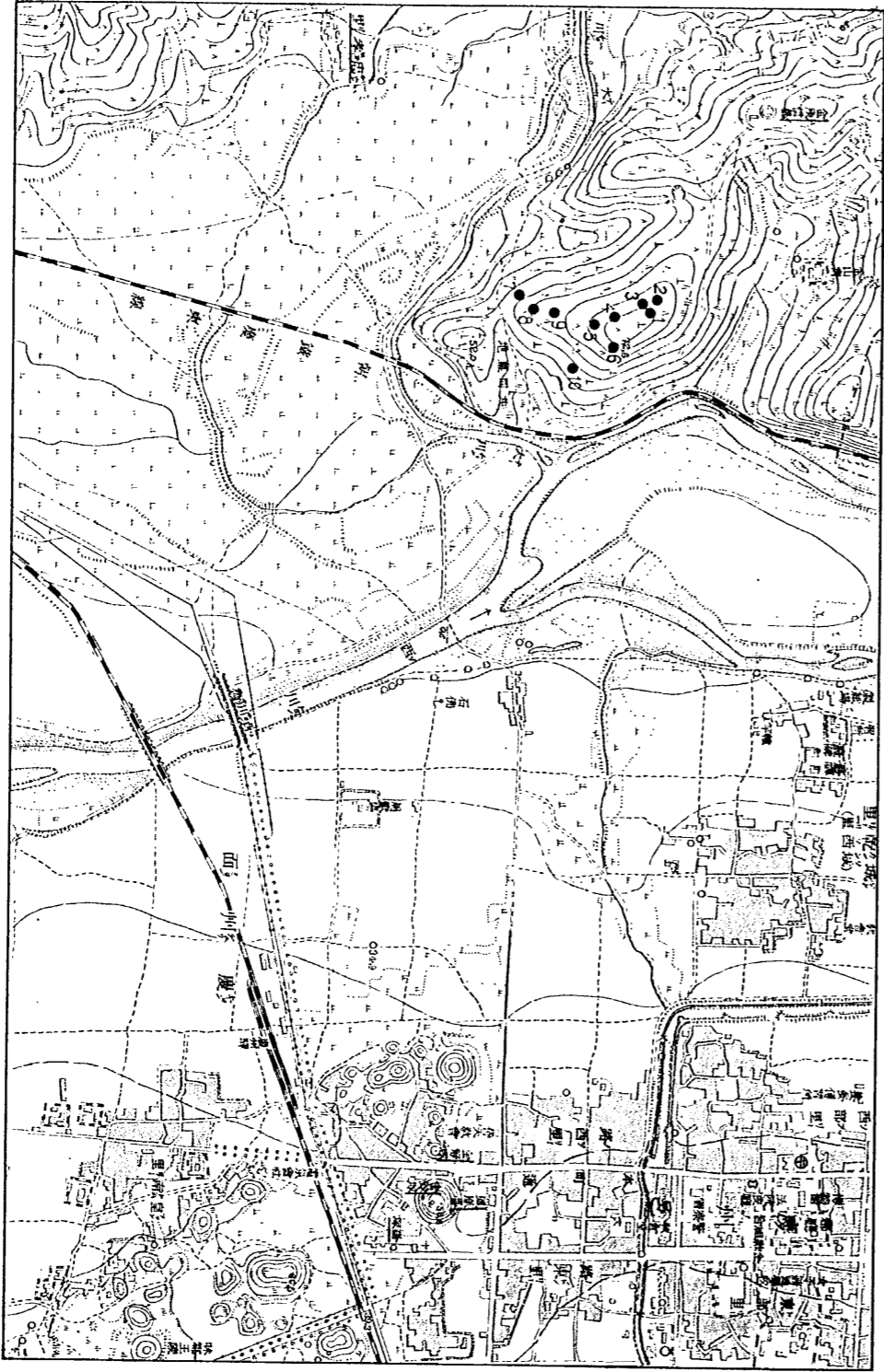
三忠孝里出土品等は其の代表的なもので後者

には淡綠色の釉藥がかけてある。

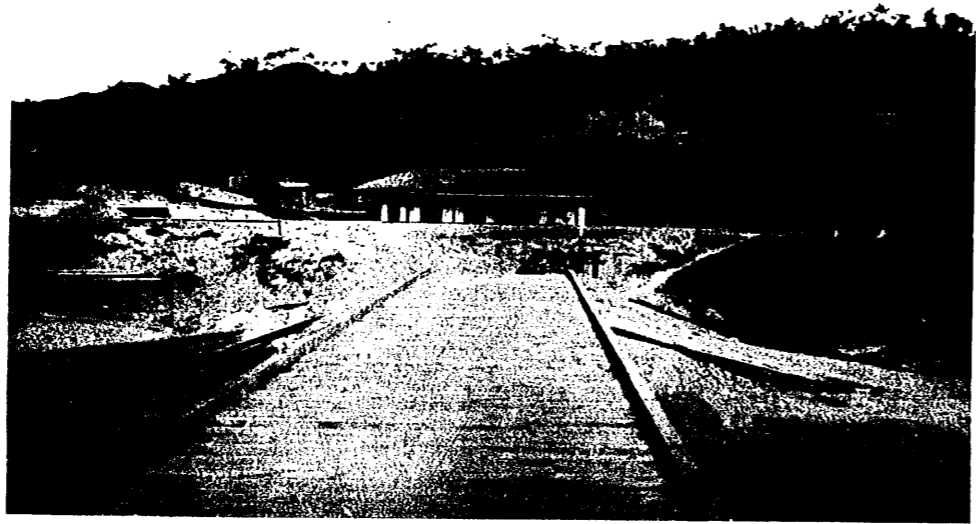
圖
版



圖版第一 調査境の位置 (一萬分一)



圖版第二



古墳群

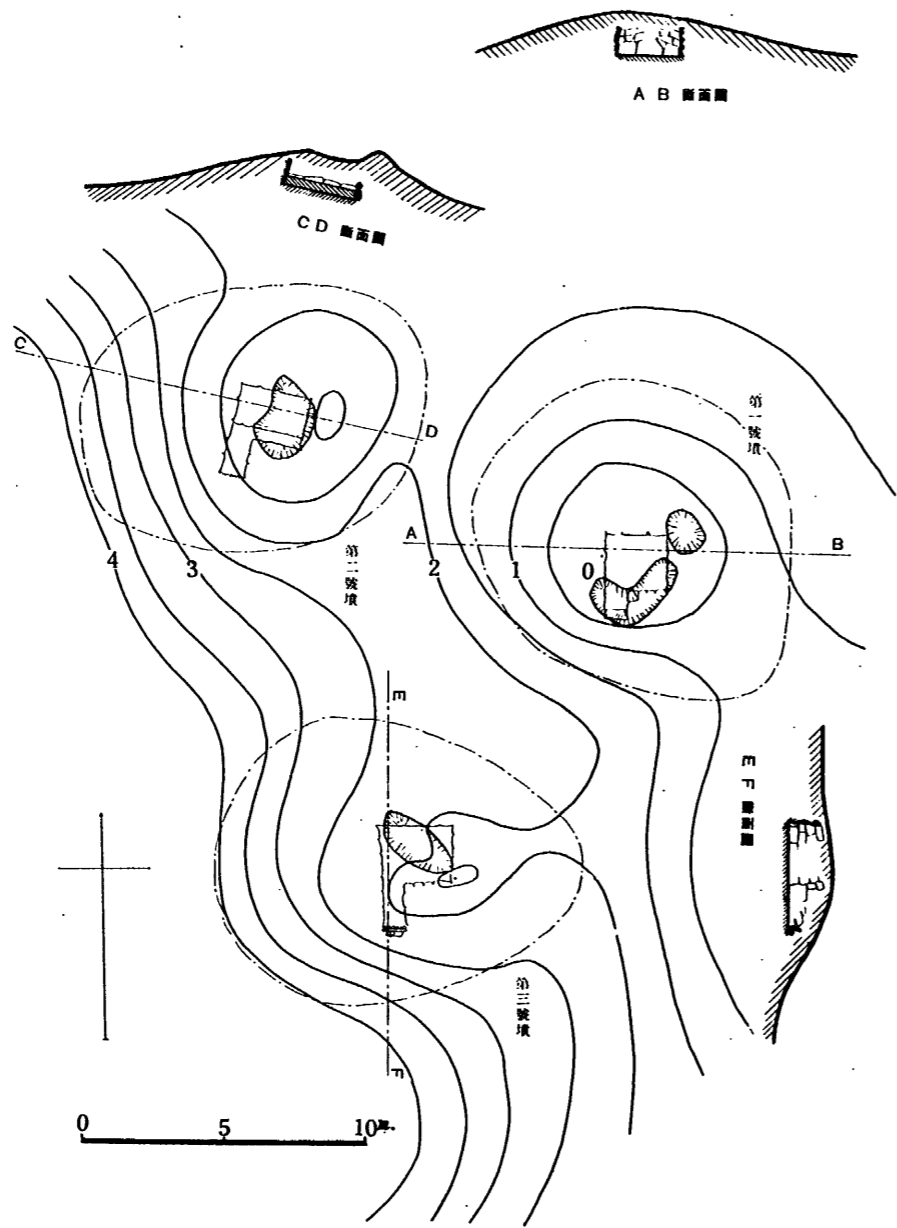


古墳群の一部

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

圖版第三

外邦全湖圖

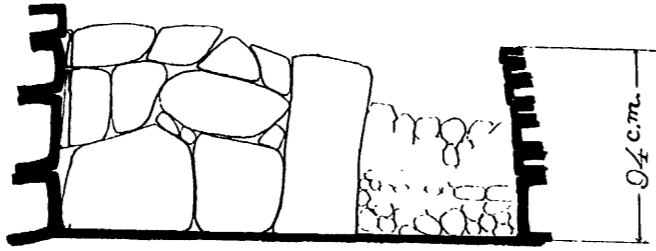




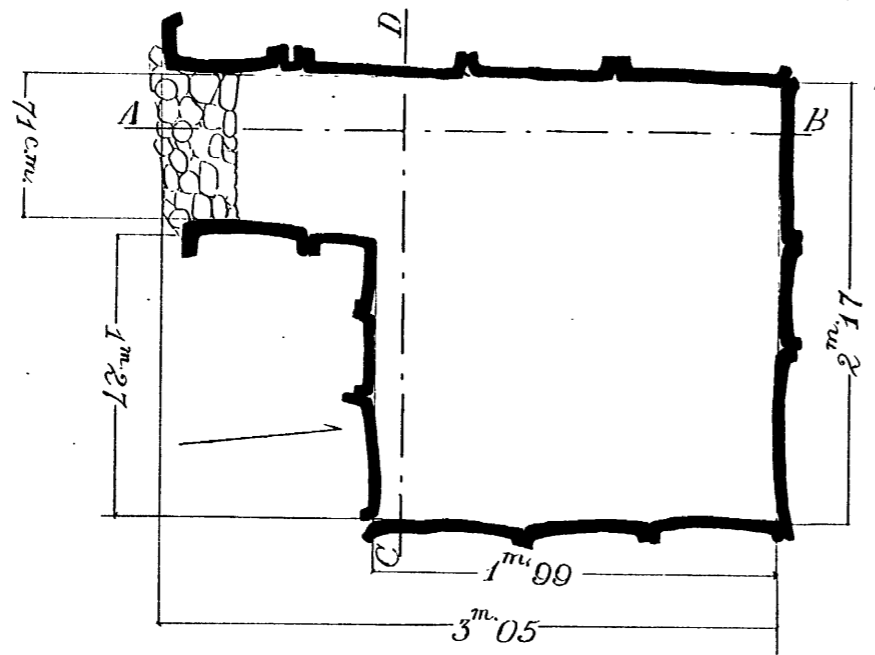
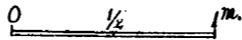
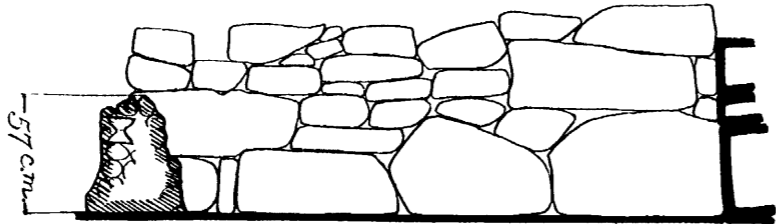
圖版第四

五

Section CD

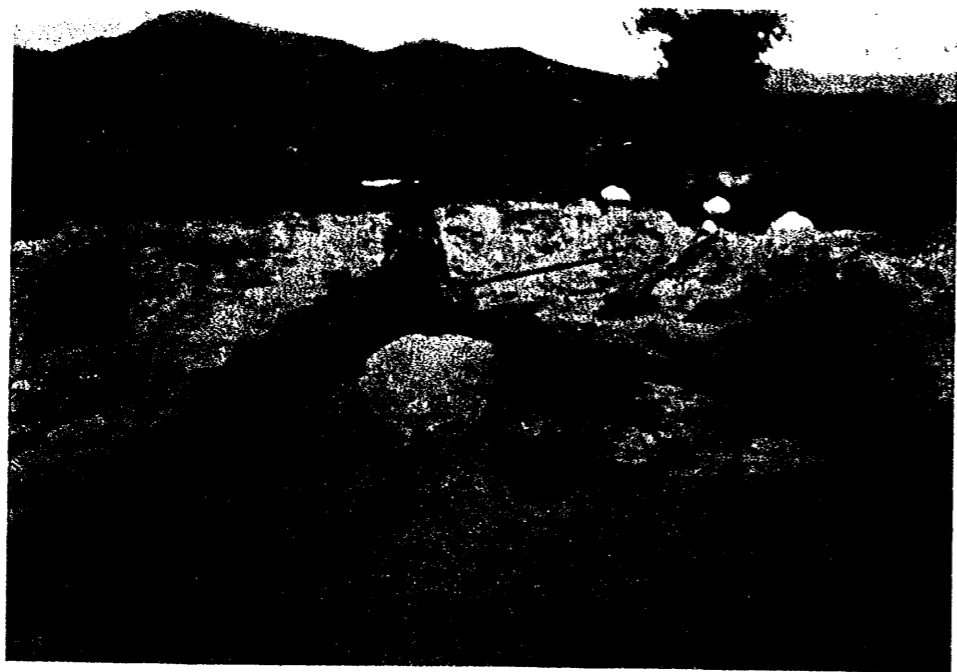


Section AB



五

第五版



山
に
見
え
る
石
集
り
に
照

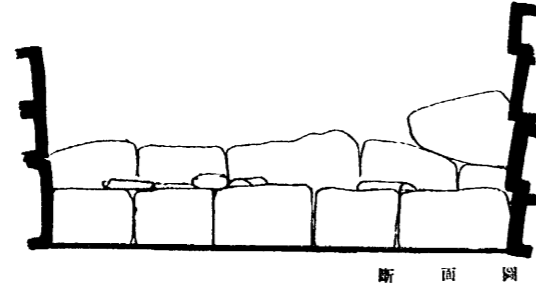
圖版第六



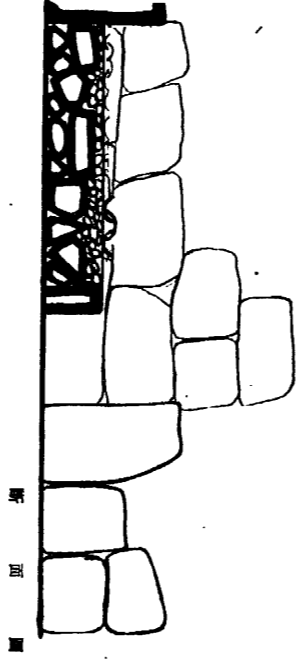
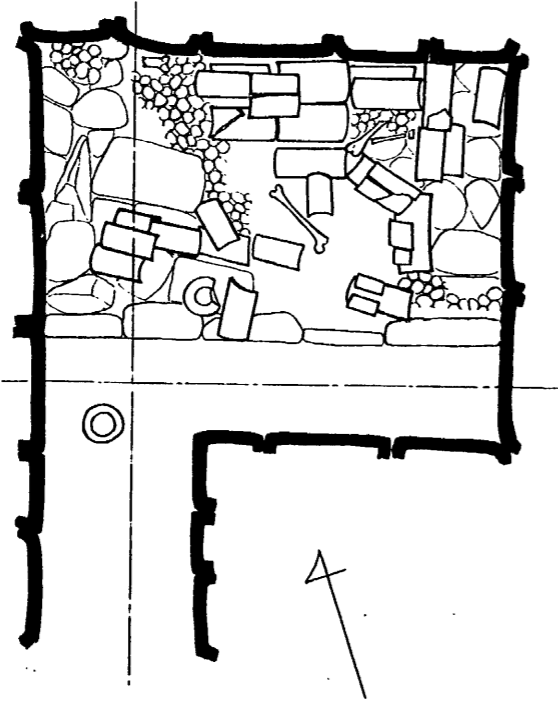
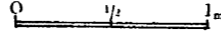
北方より見たる石室餘景

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

圖版第七



斷面圖



斷面圖

孔守宜墓門

圖版第八
北墳



西岸より見たる北墳



圖版第九



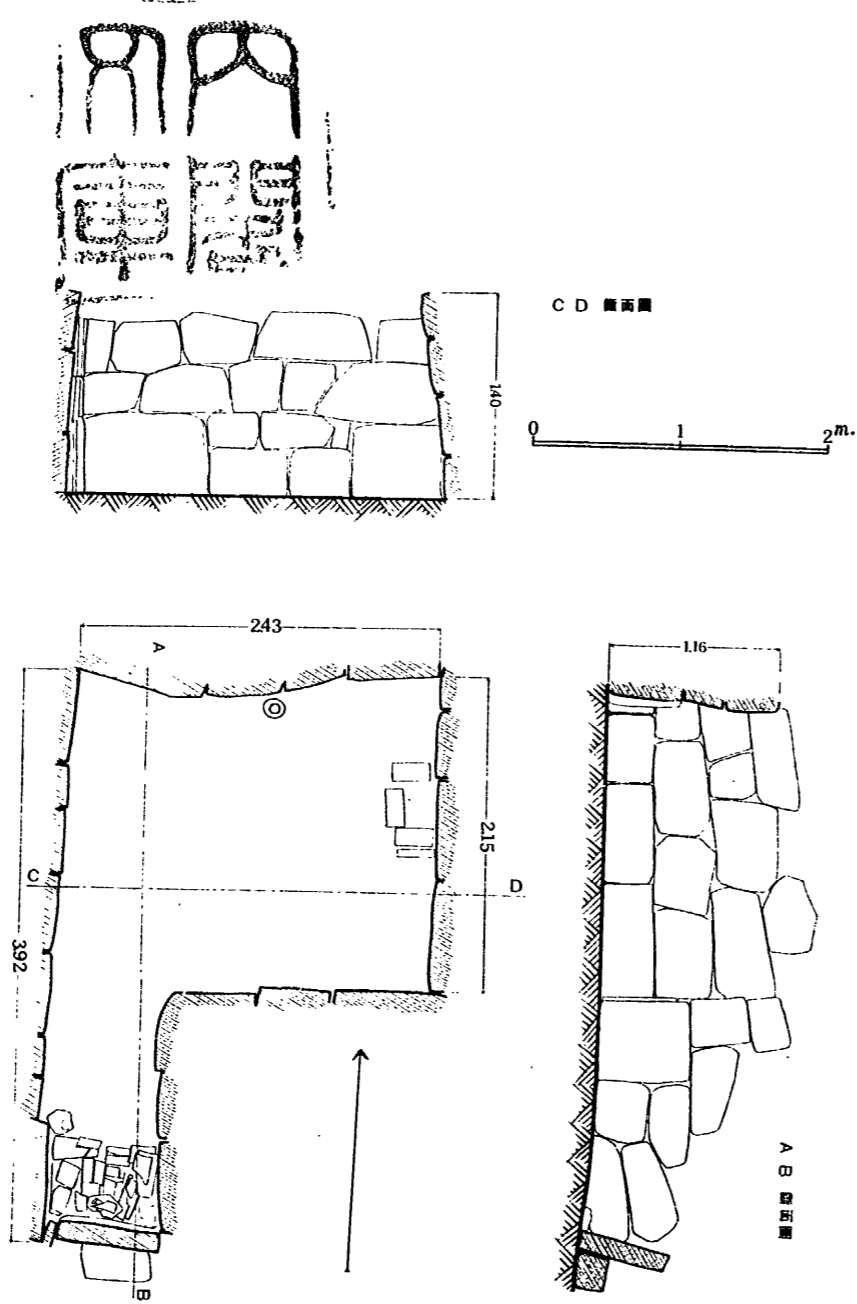
西面より見たる墓上の五列



北方より見たる調査終了後の石室

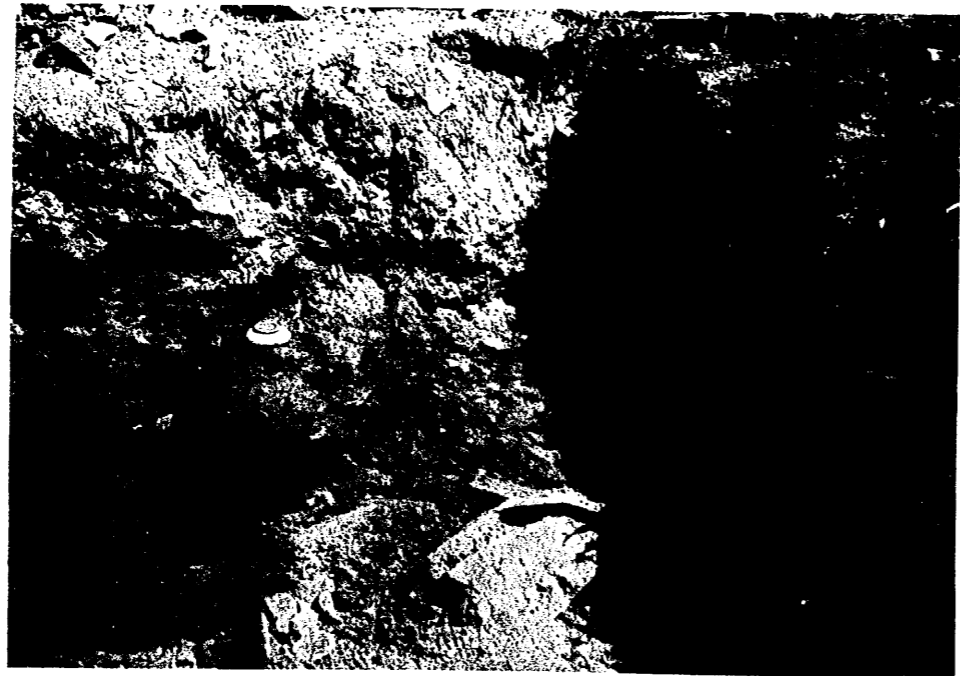
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

圖版第一〇



石室全圖

圖版第一
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百



南方よりの山麓部中の石室内部

圖版第一二
第三號墳



深道内に於ける瓦列備置



北方より見たる石室全景

圖版第一三



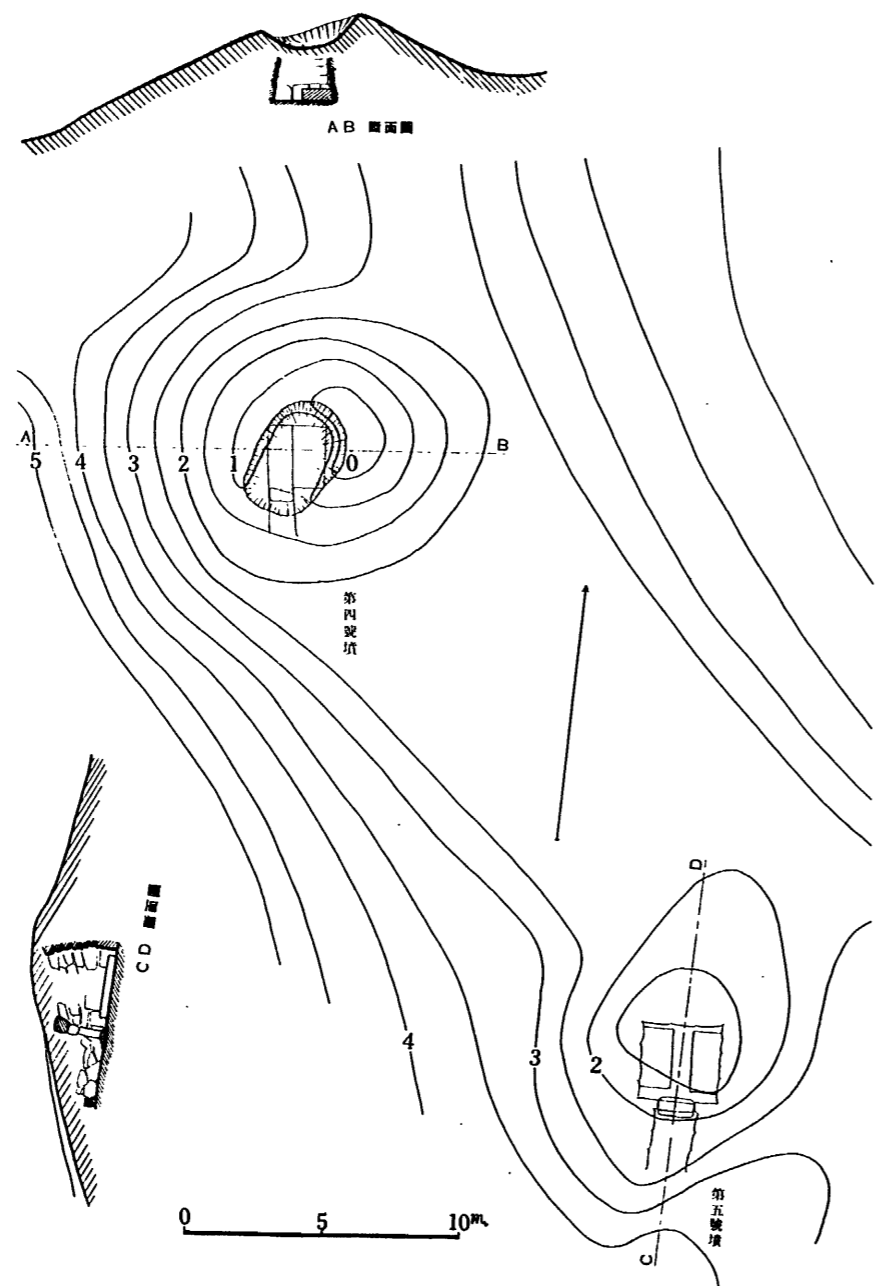
第二式

第三式

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

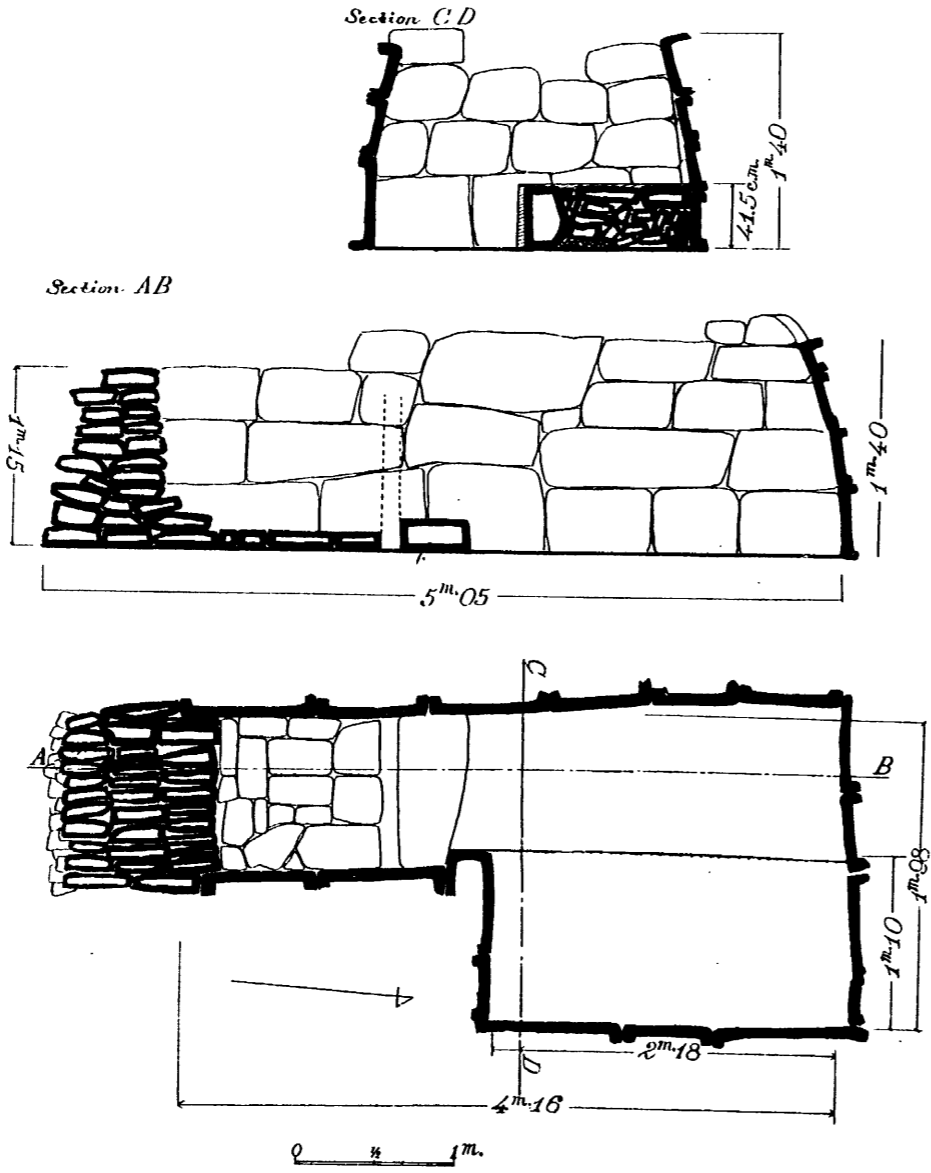
圖版第一回

古墳群の地形





圖版第一五



石室剖面圖



上ノ方ノ景

前方より見たる發掘中ノ石室跡

圖版第一七 中國雙墩



北一より見たる石室の内部



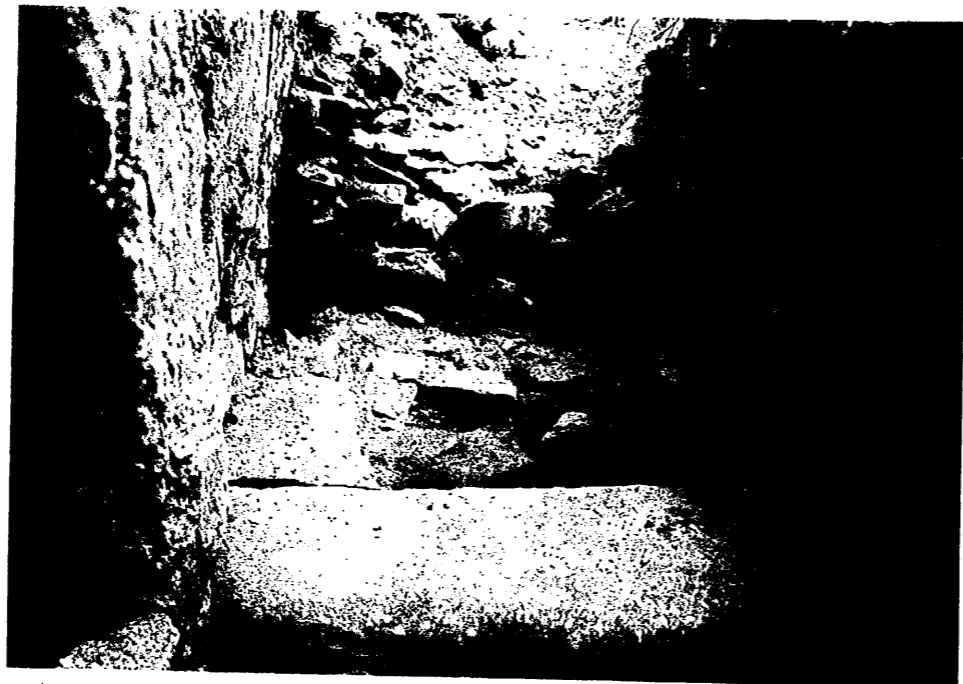
北一より見たる石室の内部

圖版第一八

五回壁墳



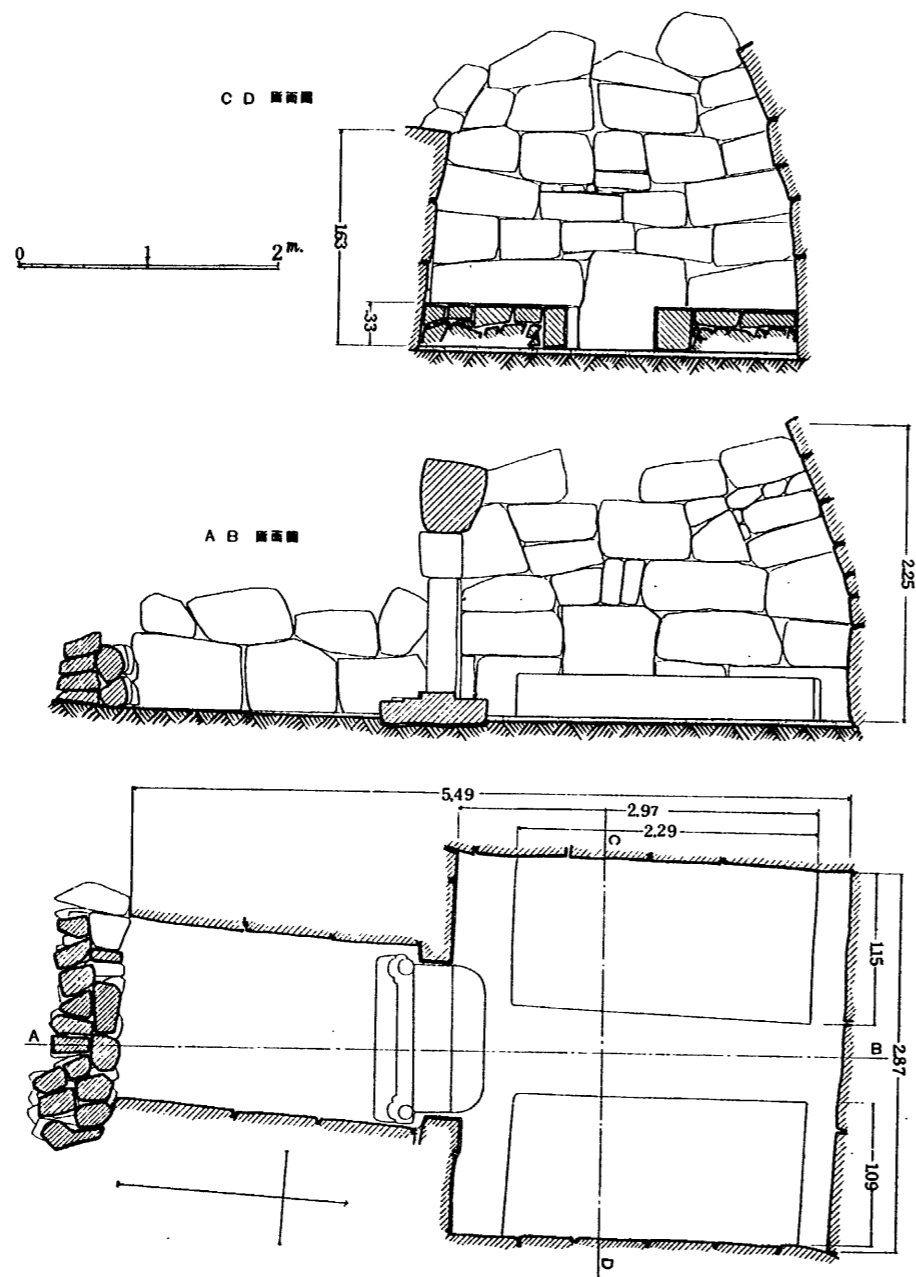
五回壁墳



洋道の瓦塞石積

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

圖版第一九 第三號墳

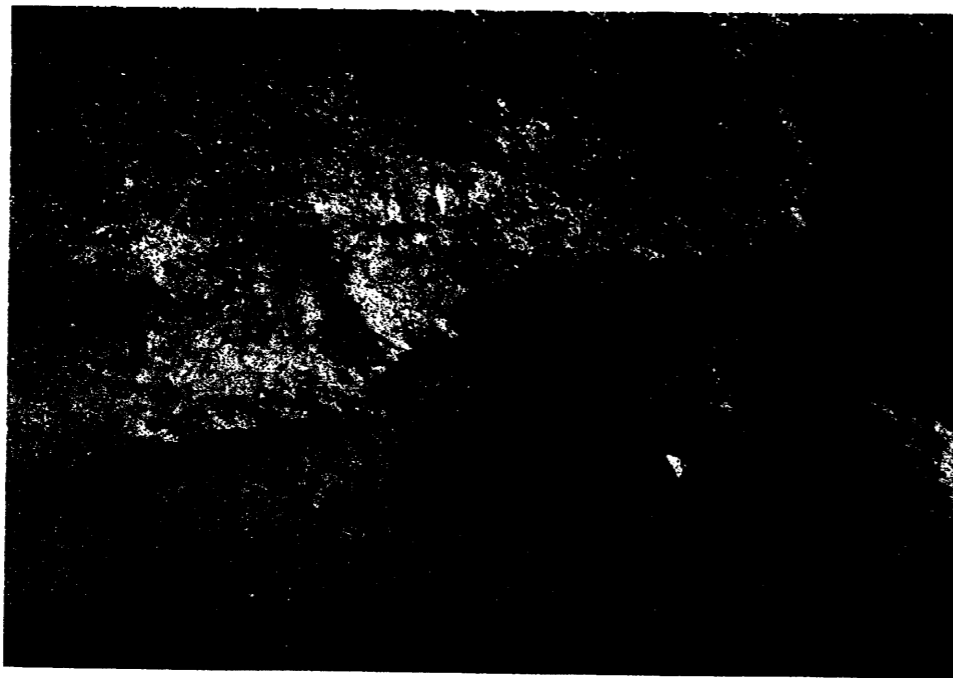


石室墳圖

圖版第二〇 第五號墳



山北方より見たる外觀

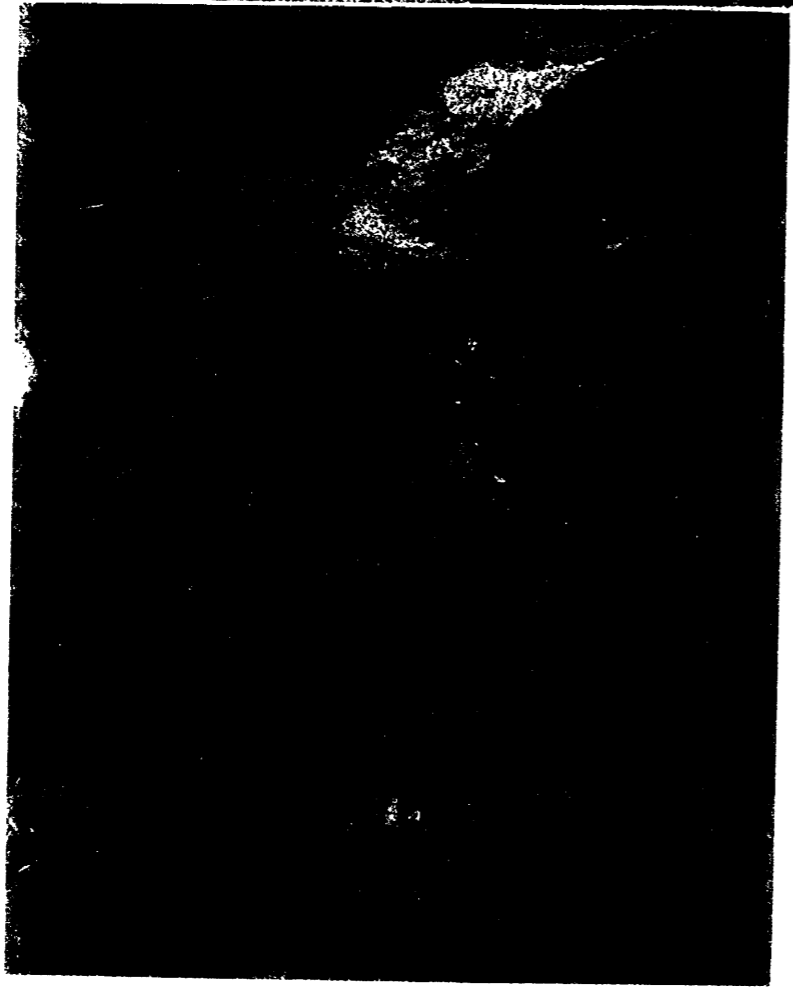
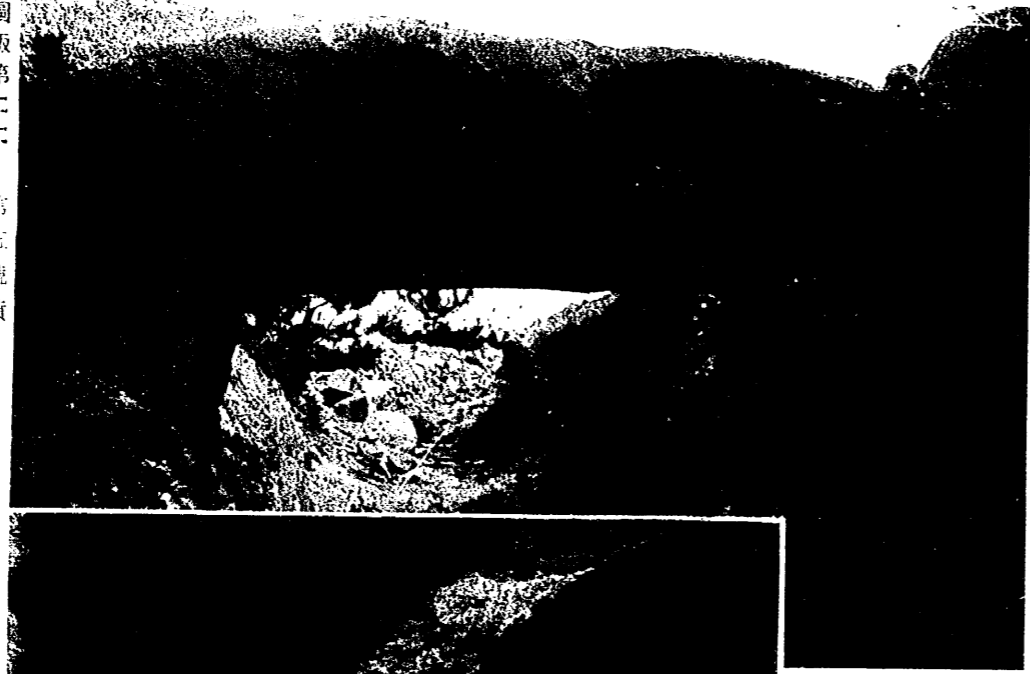


天井石の上に於ける鐵鍬出土原狀



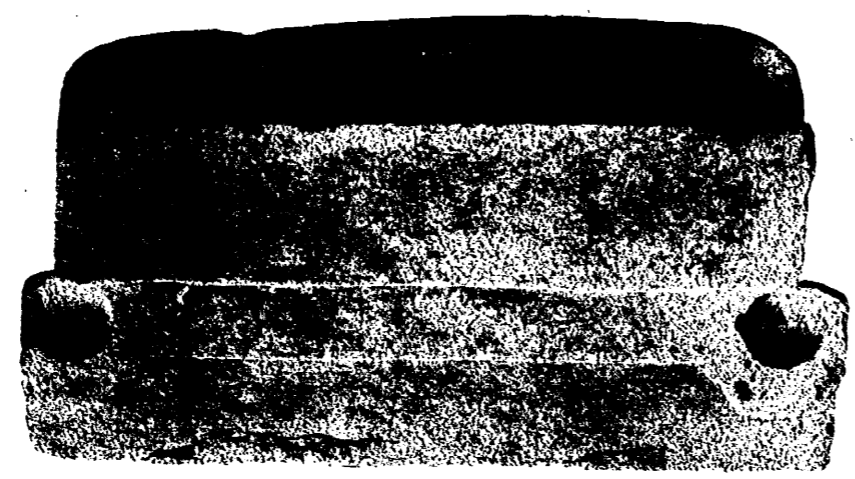
南方に五段なる石室全景

圖版第二二
等三號墳

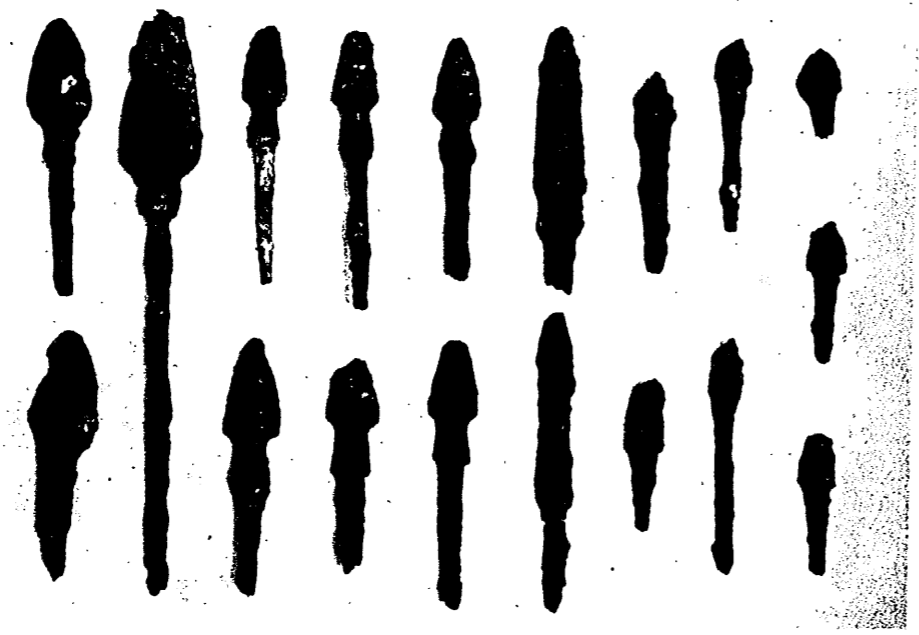


上石室（石室）
下石室（石室）

圖版第二三
第五號墳



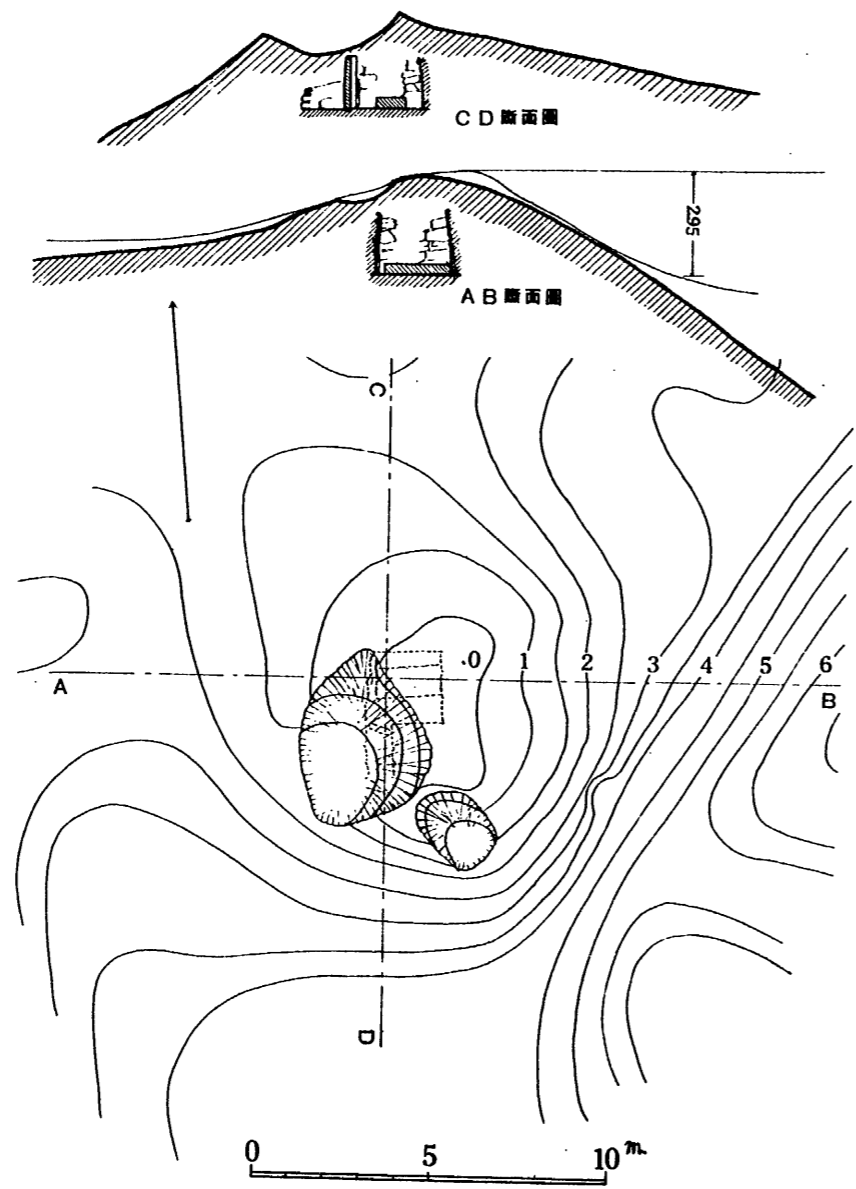
關石



鐵
鏃

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

圖版第二四 第三號墳

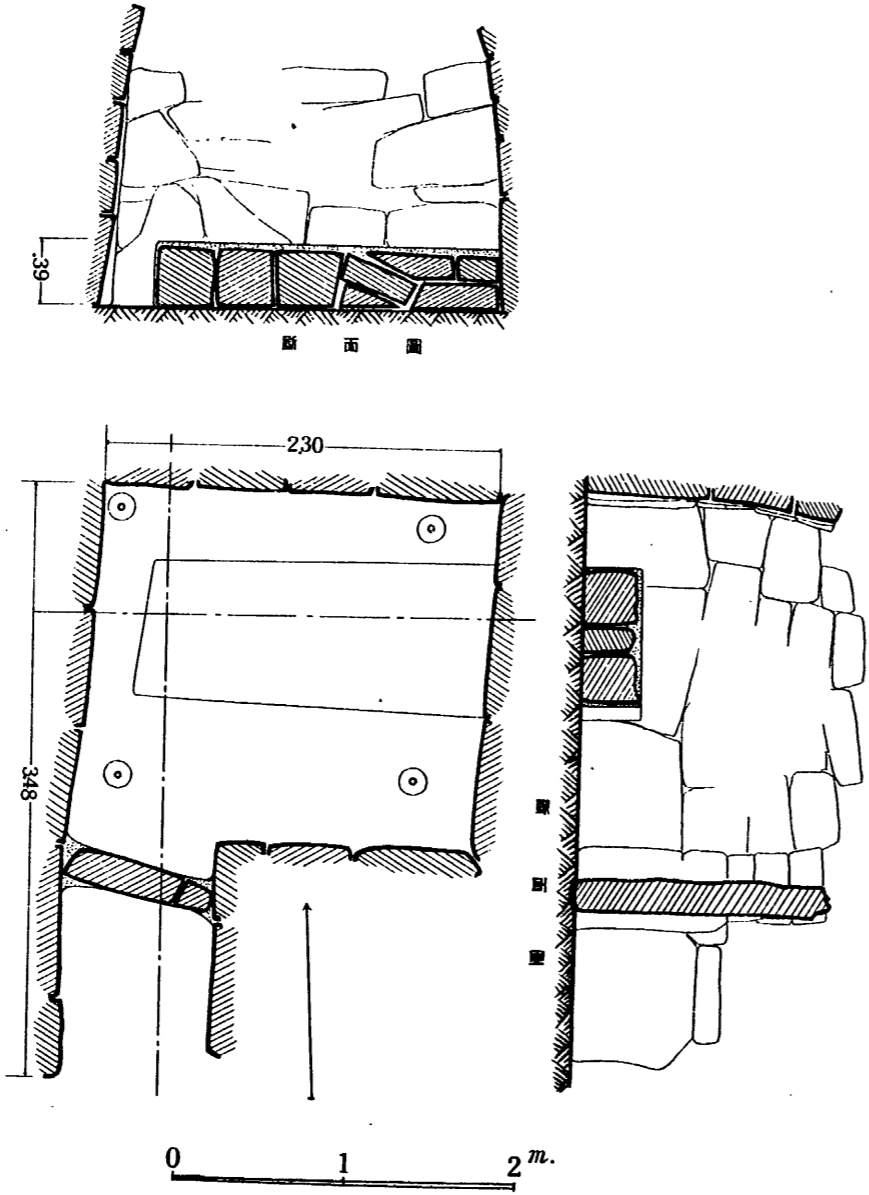


夕井「遺蹟」



圖版第二五

第六號墳



圖版第二六 第六號墳



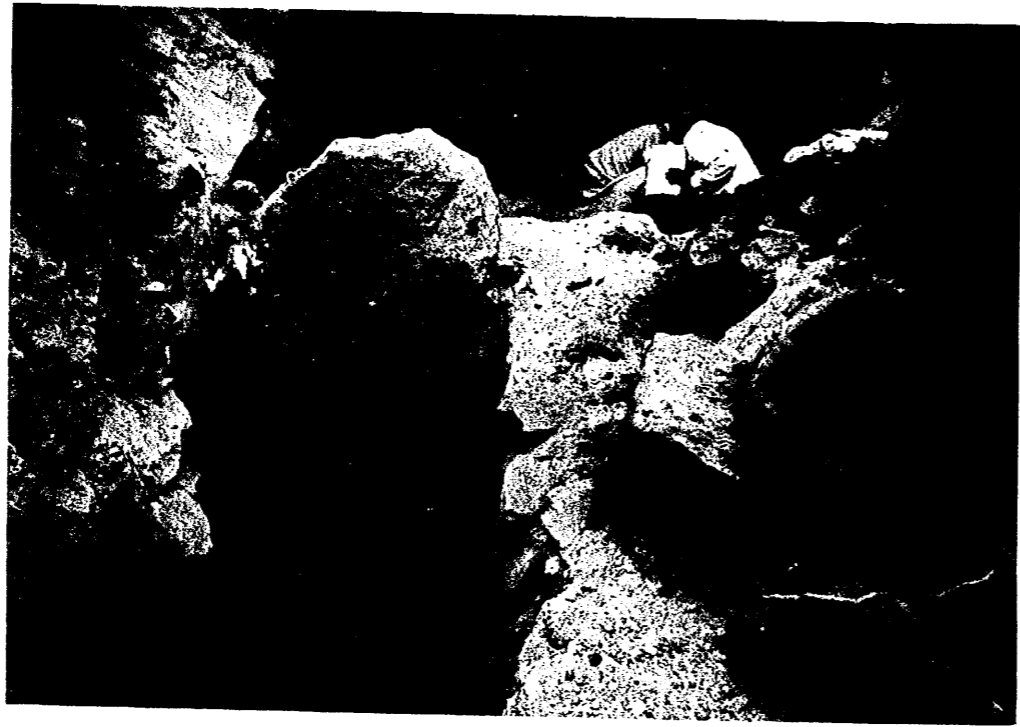
西南より見たる被掘り金に於ける野土断面

圖版第二七

二六五墳



二六五墳



南方より見たる石室全景

圖版第二八
第六號遺



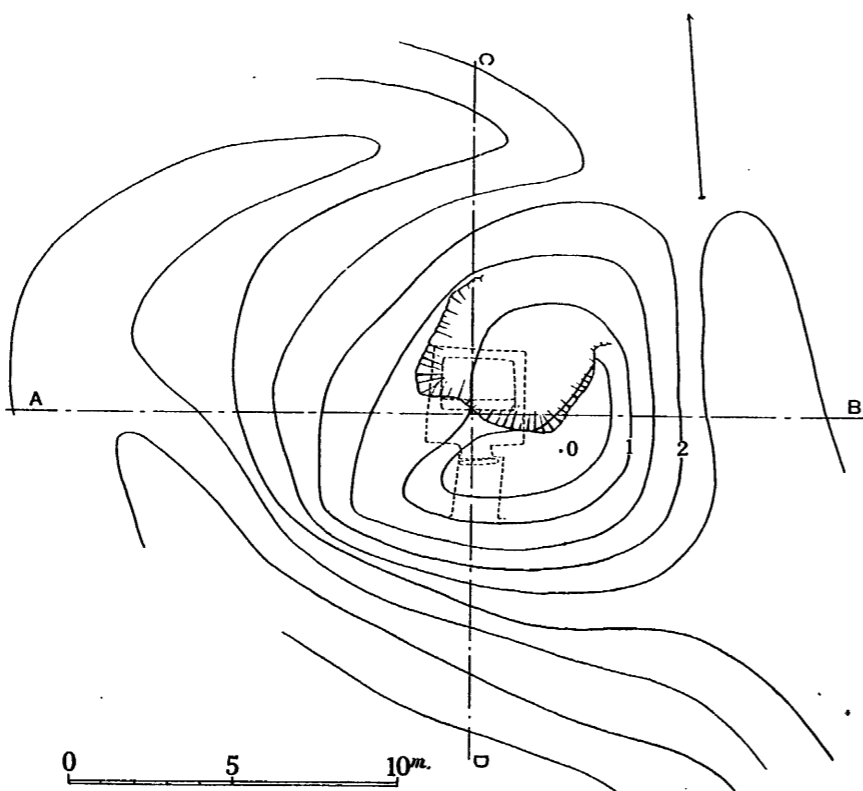
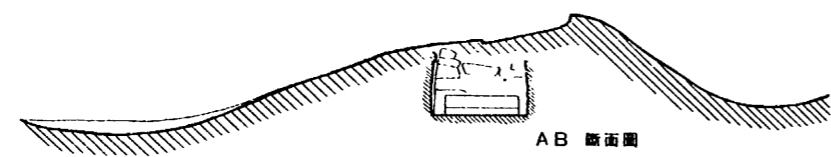
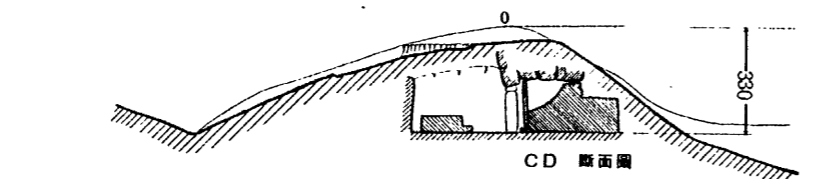
上
下 陶器中に在りたる遺物



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

圖版第二九

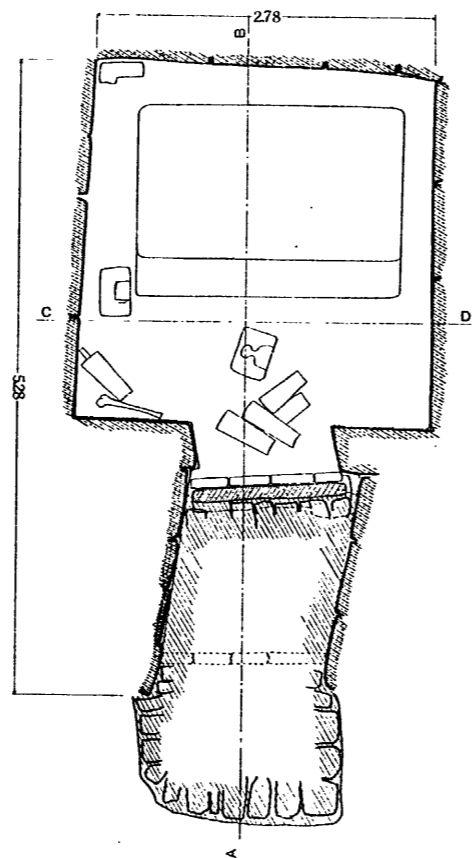
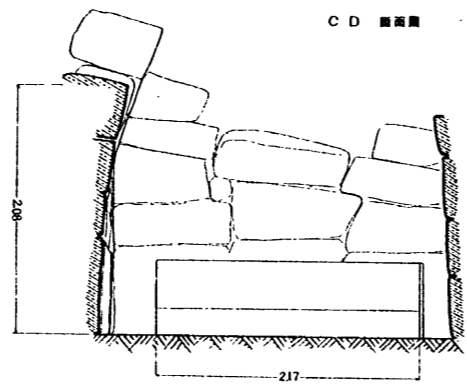
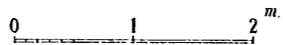
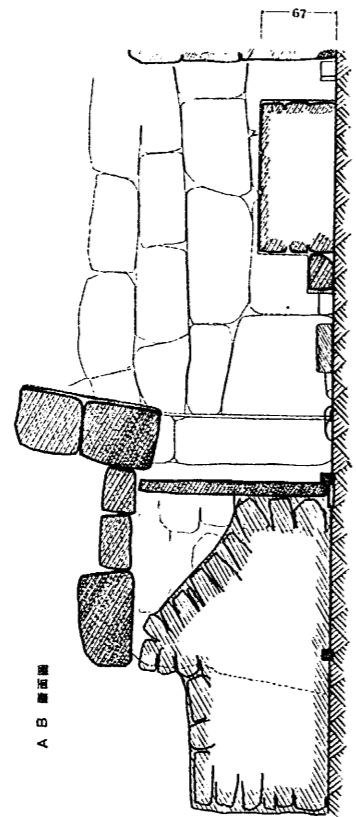
五二號



外井台遺跡

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

圖版第三〇 第七號墳



石室の平面

圖版第三一

第六墳

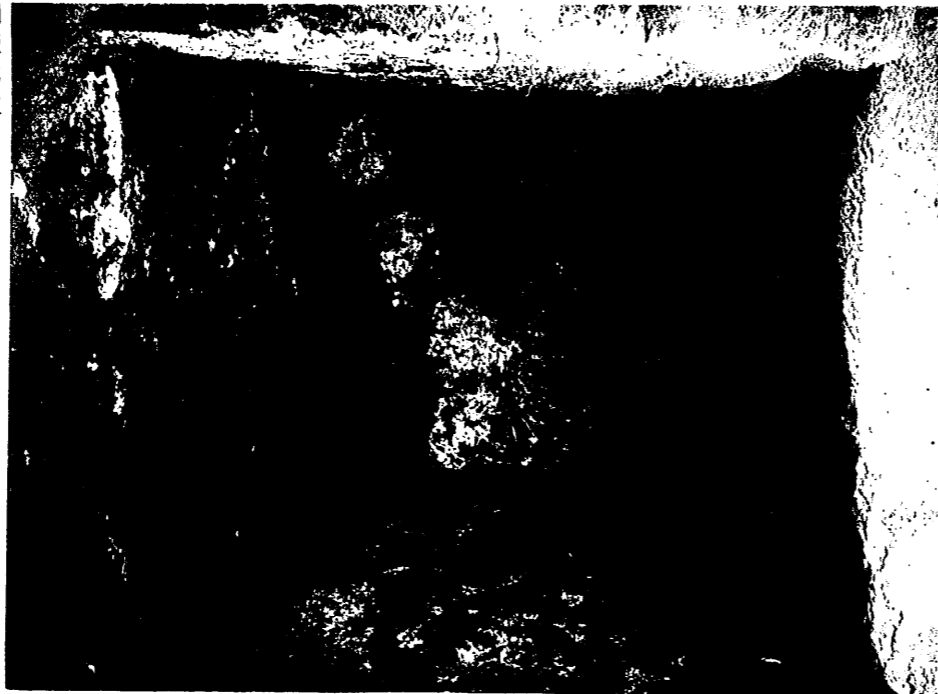


第七墳



上 西南方より見たる外觀
下 南方より見たる溪道充填状態

圖版第三二 第七一頁



釜淵石原出現狀



深道より女室を望む



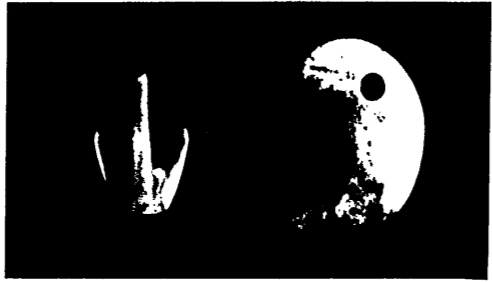
同版第

第

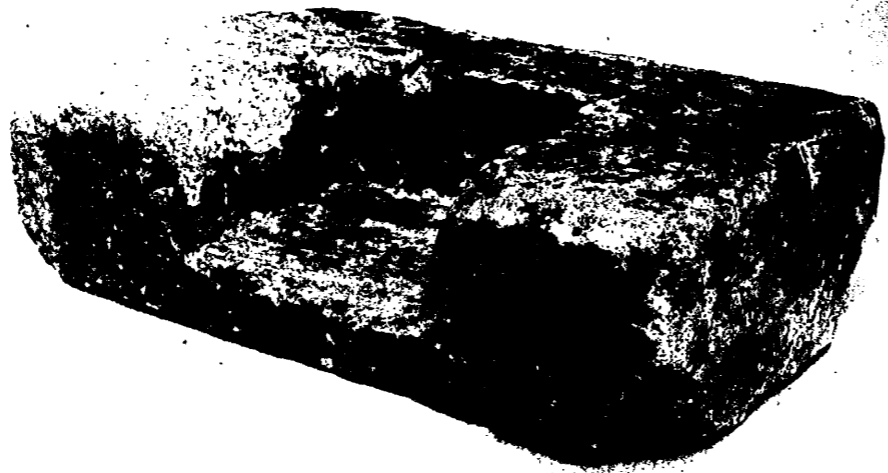
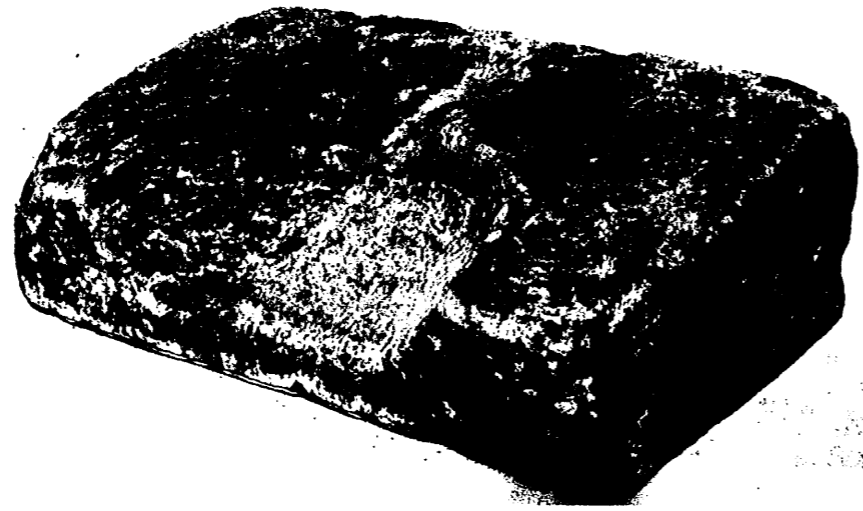


ひる玉類
音出上状態

圖版第三四
紅坑

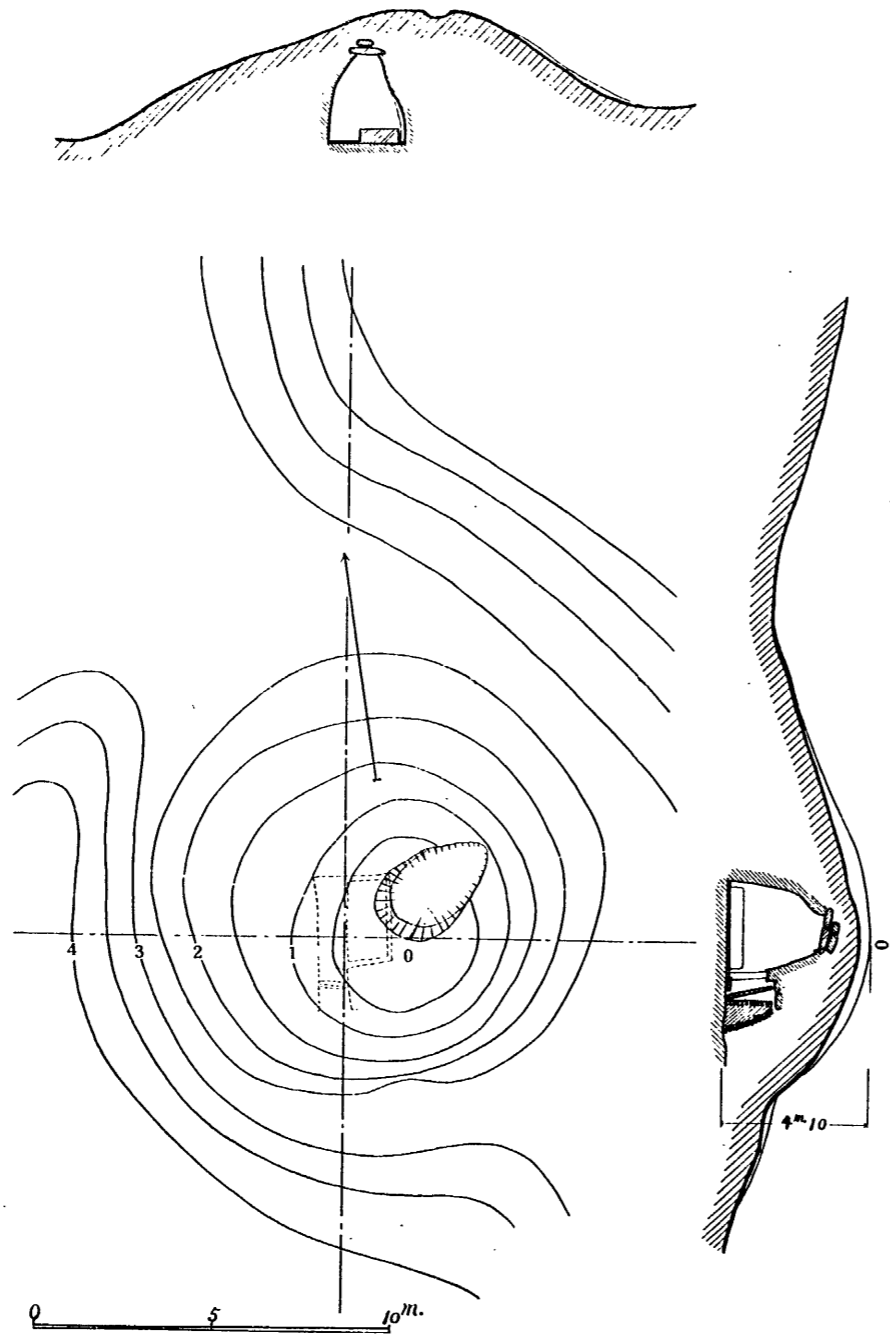


天石尹
式石神
大石尹
大石神



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

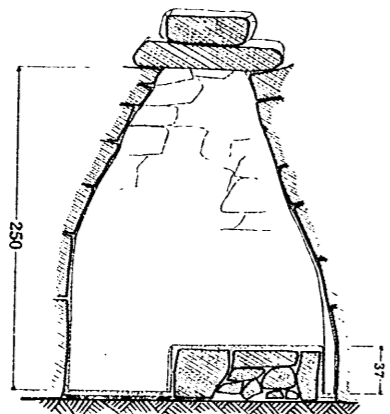
圖版第三五 第八號墳



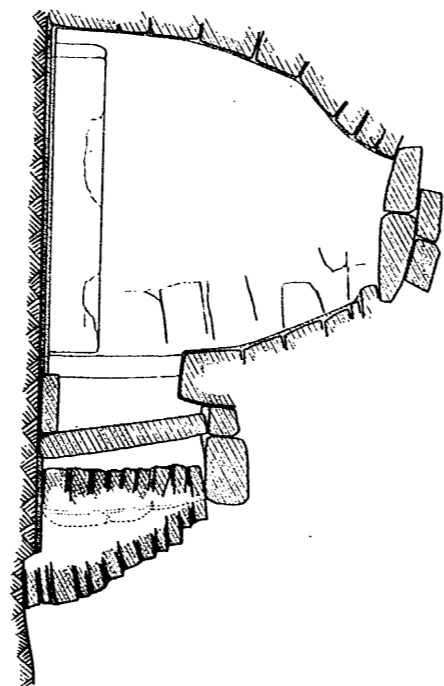
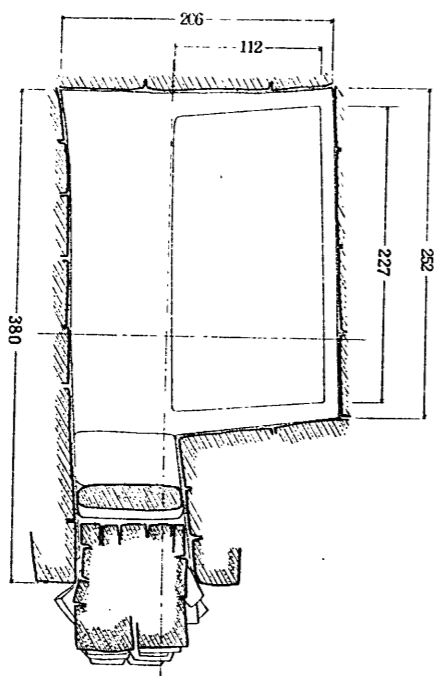
外五官湖圖

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

圖版第三六 第八號墳



0 1 2m



三石室開口

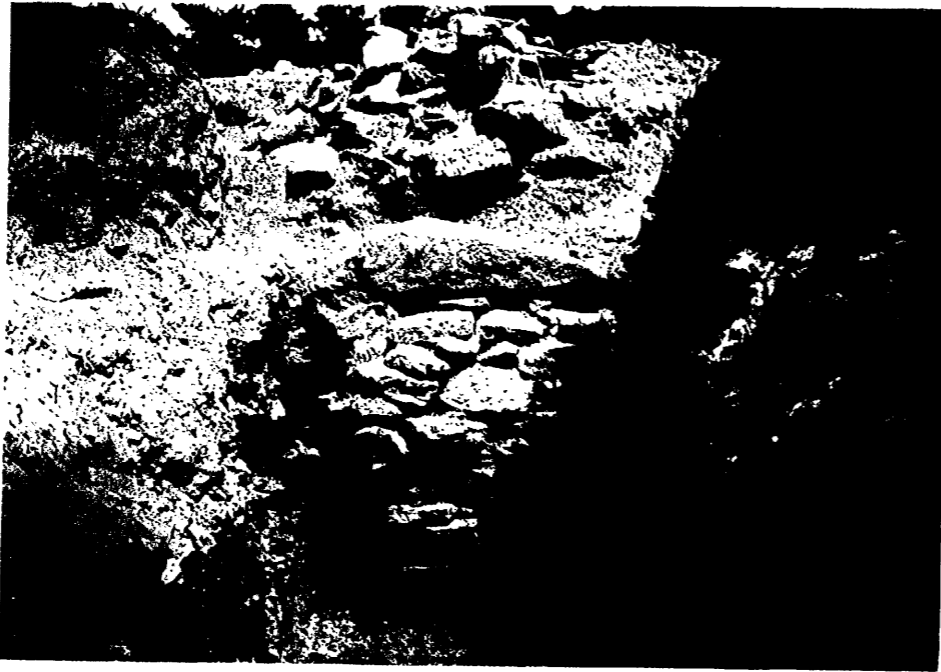
圖版第三七 第八號墳



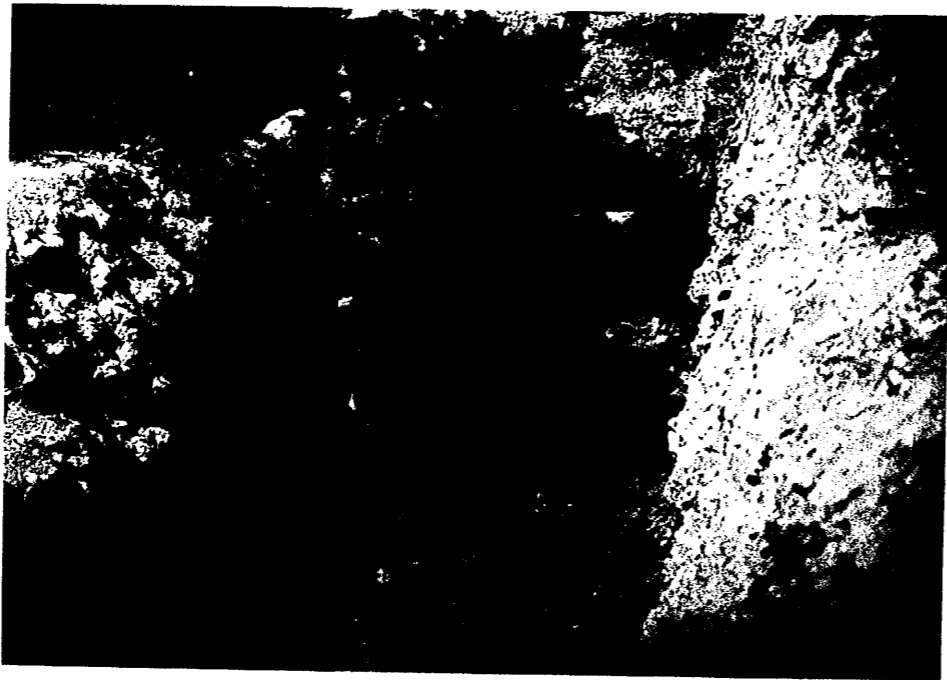
南方より見たる外観



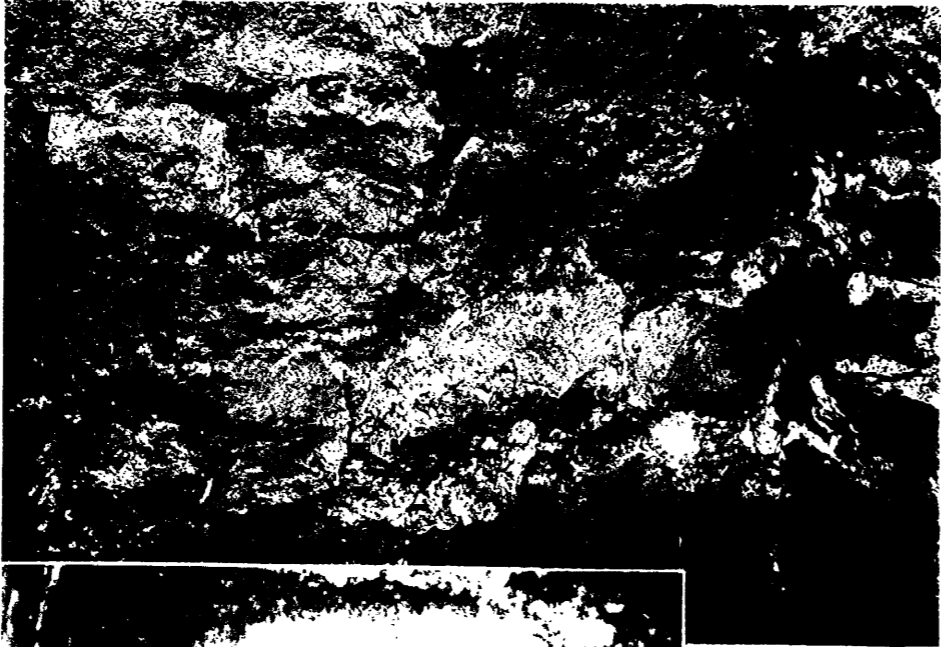
玉井の外表



南方より見たる溪道充塞石積



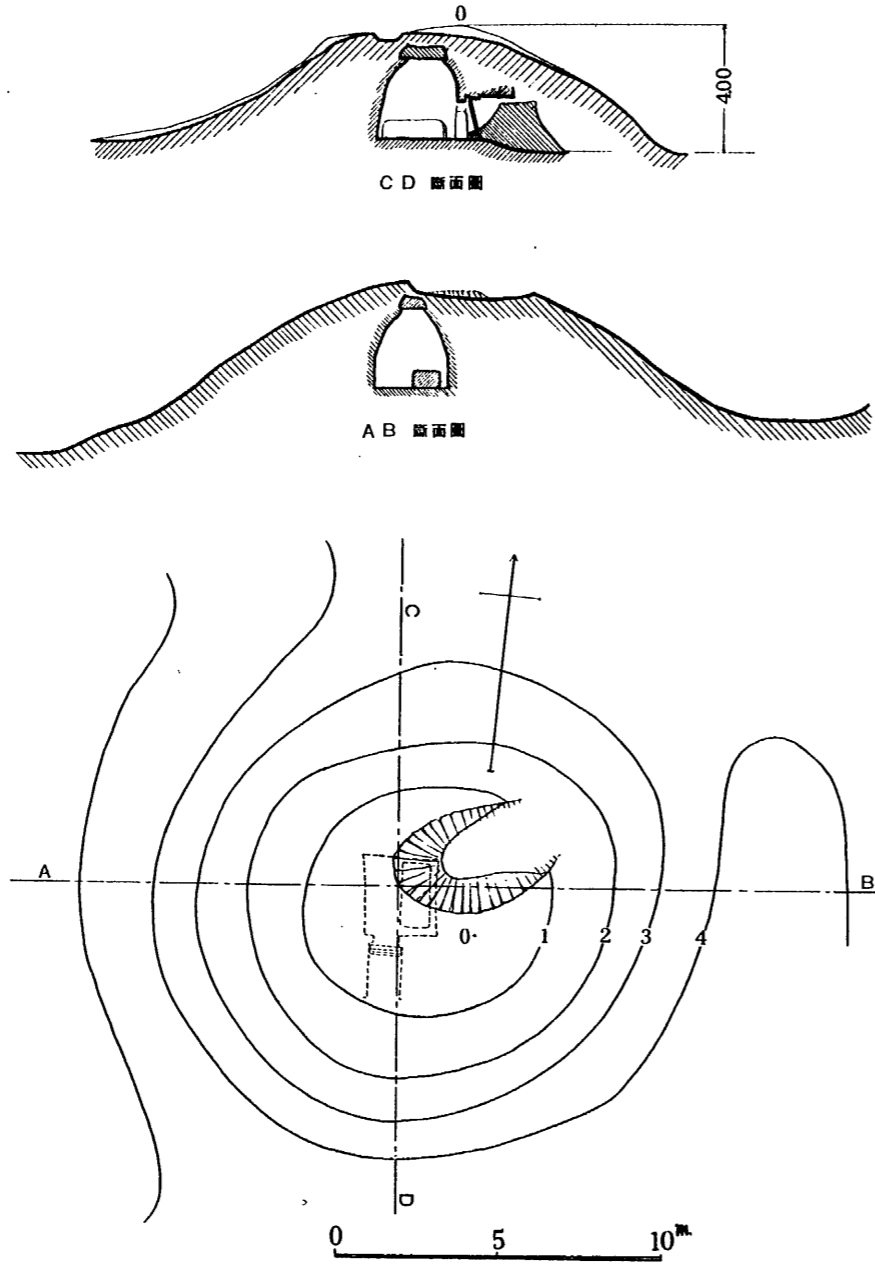
充塞石積を除きたる溪道



石室の部石敷状態(北西隅)
上 石室内部

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

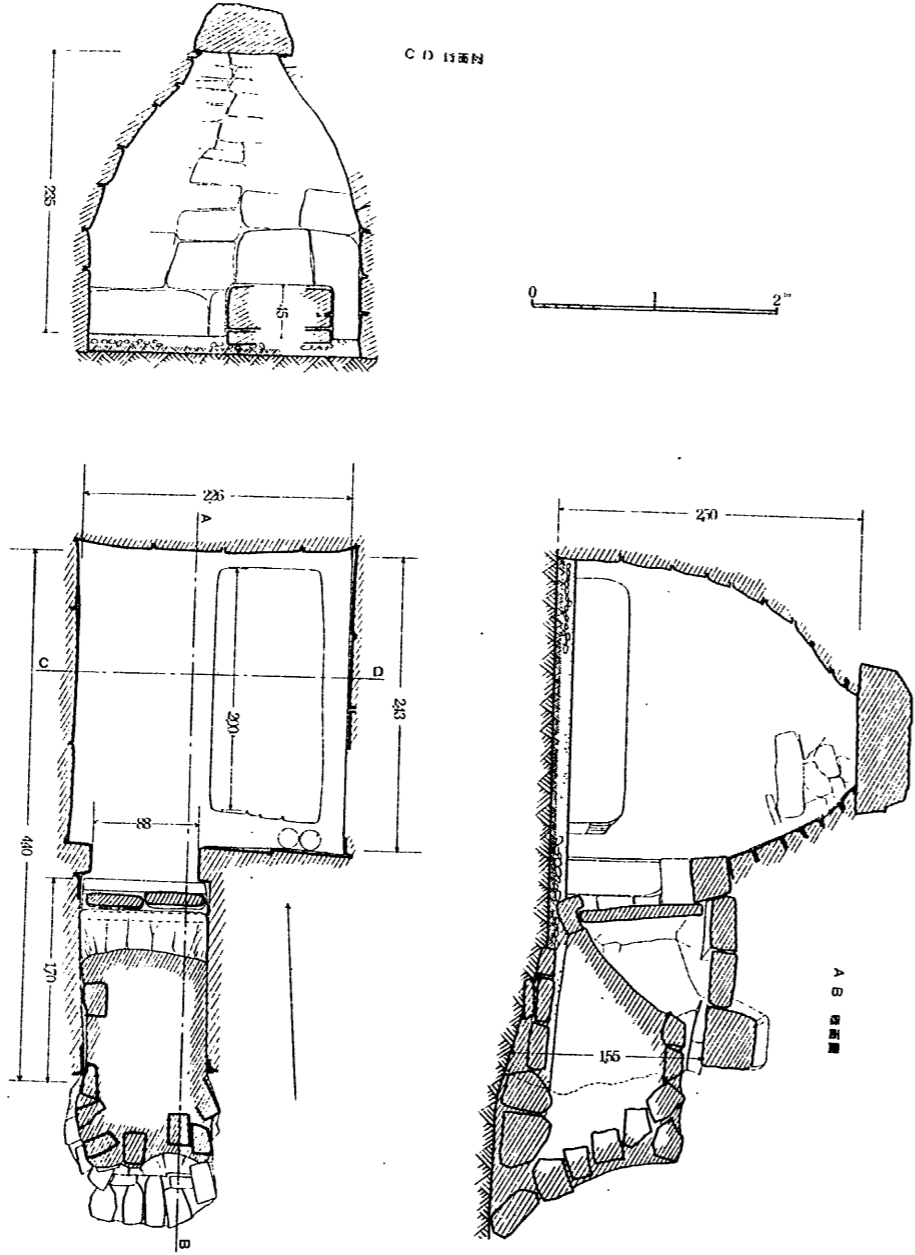
圖版第四〇 給九號墳



夕井字墳圖

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

圖版第四一



石室圖

圖版第四二 第三號墳



上 南方より見たる外觀
下 入口の状況

圖版第四三 五九號墳



↑ 鉄道に於ける石扉出現状態
↓ 石扉を開きたる狭道（前方より撮影）

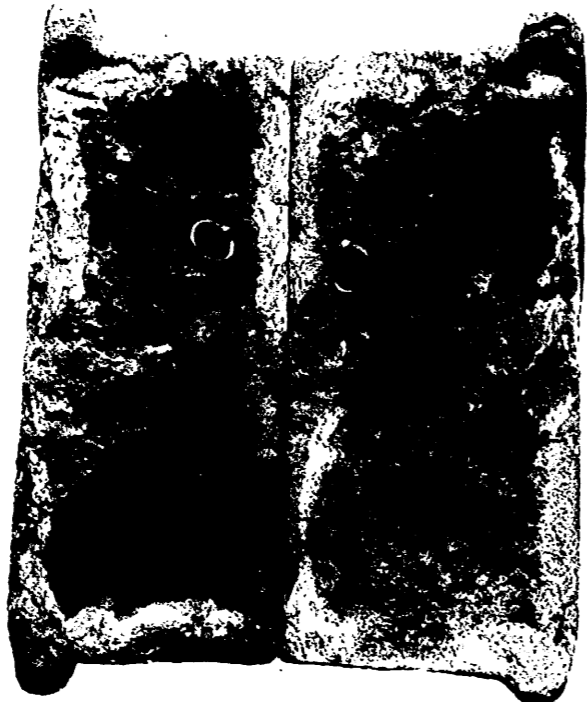


右空内那東南側

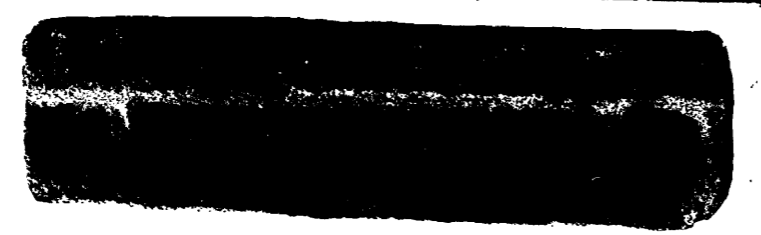


左空内那西南側

圖版第四五 第九號墳



石
金具
石



圖版第四六 第九號墳



銅
壺

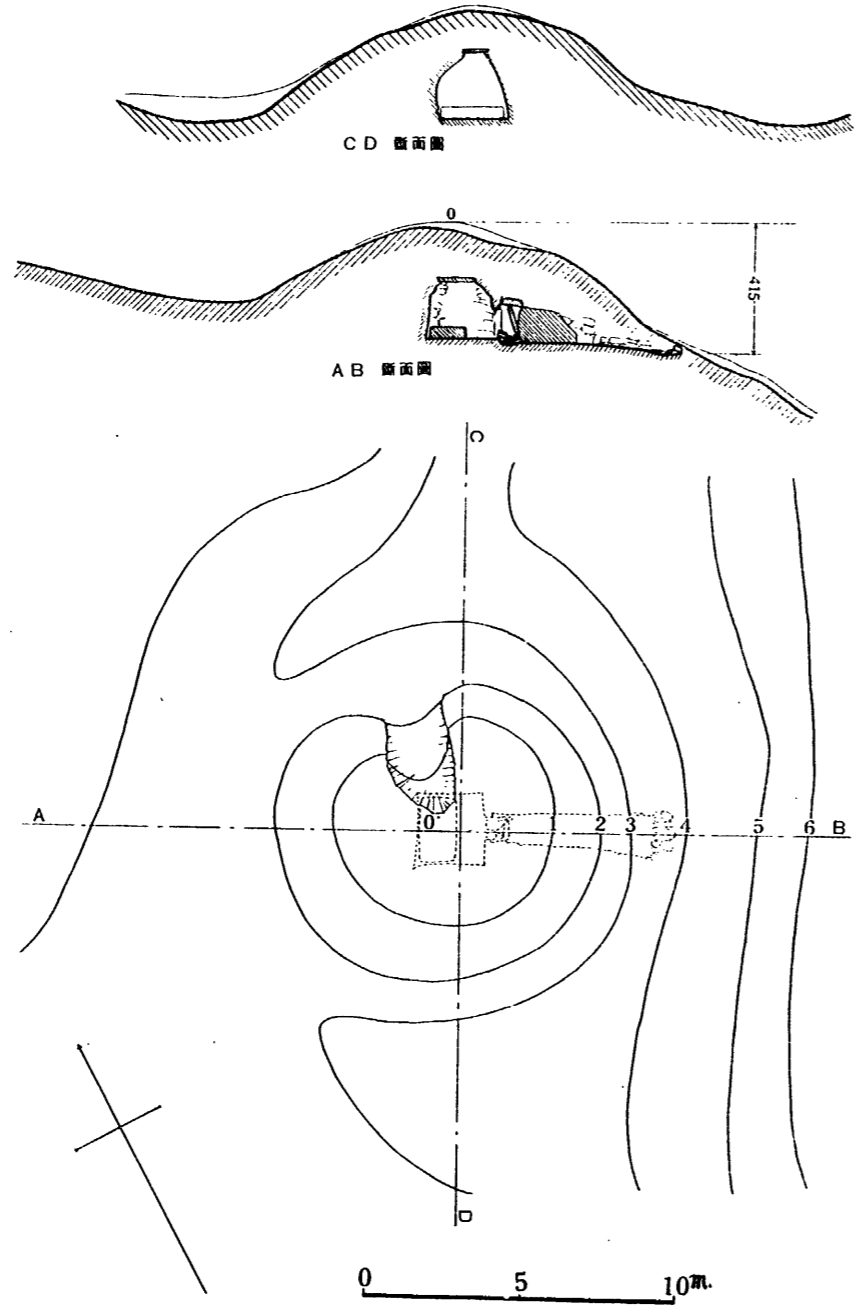


銅
壺

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

圖版第四七

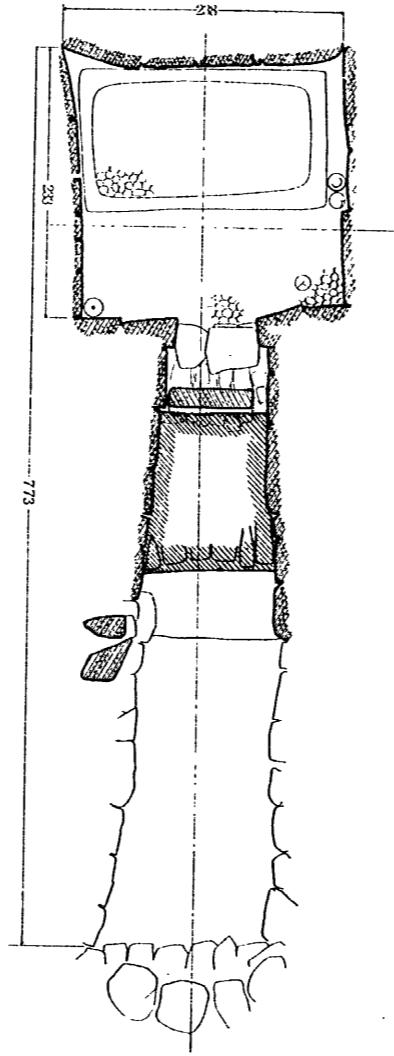
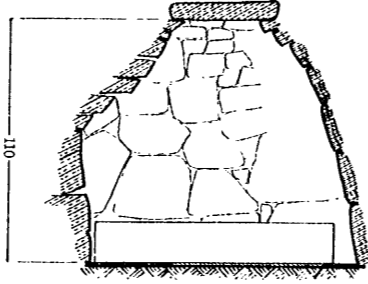
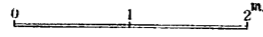
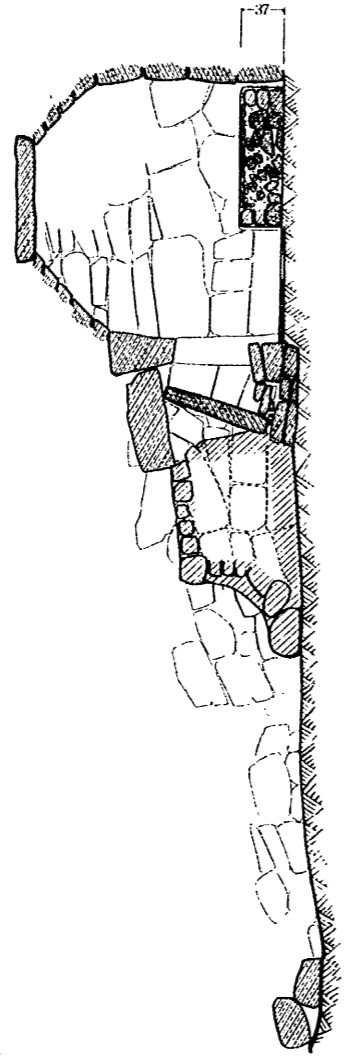
外水門遺蹟



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

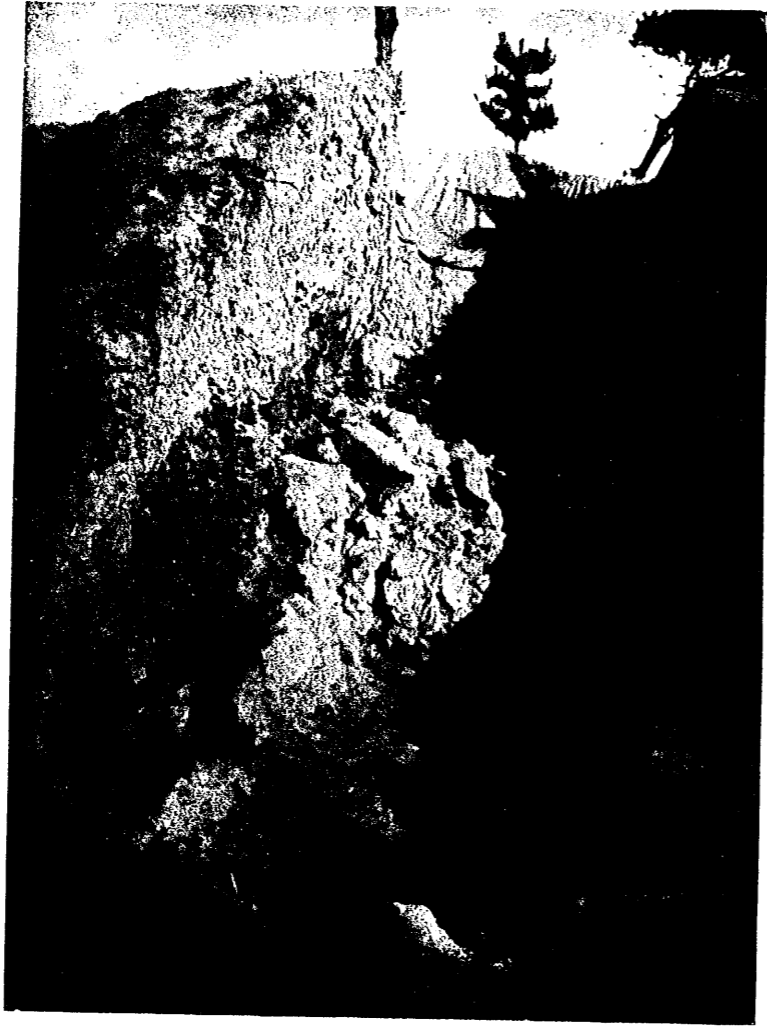
圖版第四八

石室



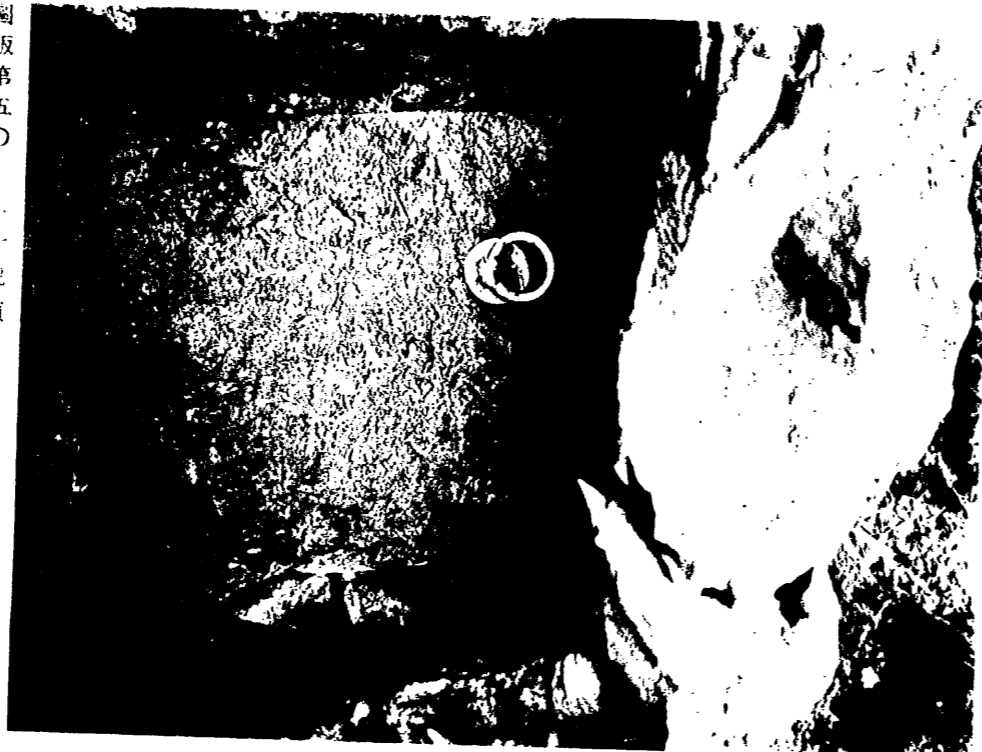
石室剖面圖

圖版第四九
第十一號墳



この見方の空
は野原

圖版第五〇
二十號墳



臨時圖版第五〇



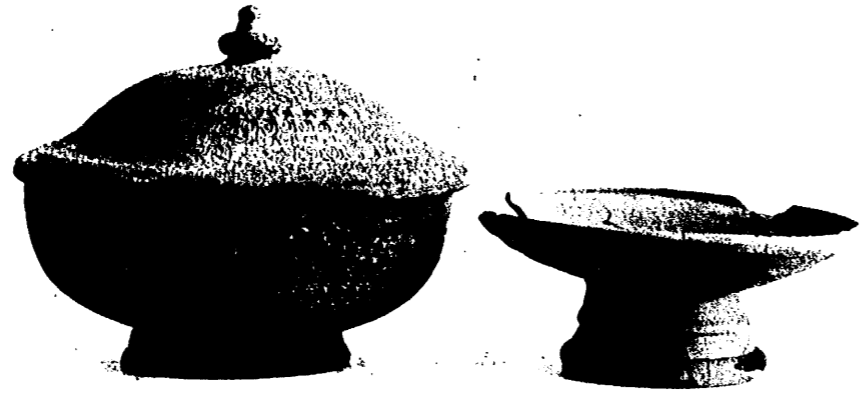
臨時圖版第五〇



部一臺棺及び隔北室女



景嶽佐床室及表上の臺棺



器 十



鉸 具



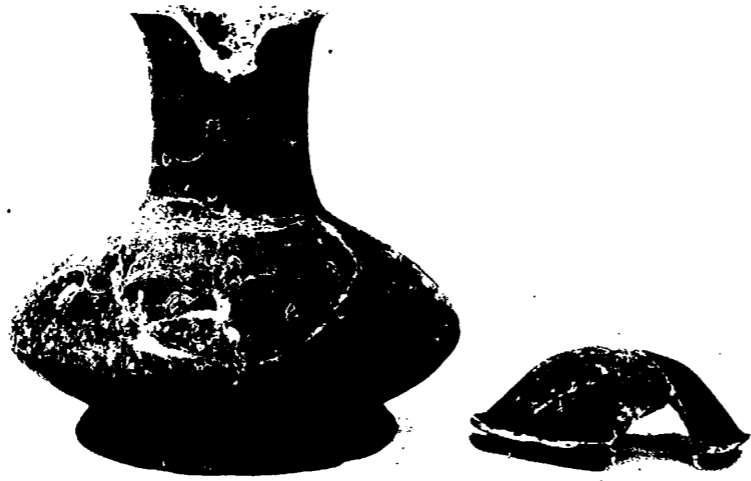
環 座



環 座 金 具

圖版第五三

上海青浦崧澤遺址出土的陶器



图版第五四

新石器时代
仰光
彩陶



图八

图九

昭和十二年三月二十五日印刷
昭和十二年三月三十日發行

朝鮮總督府

京城府蓬萊町三ノ六二
印刷所 朝鮮印刷株式會社

